

まんのう町内遺跡発掘調査報告書 第4集

中寺廢寺跡

平成19年度

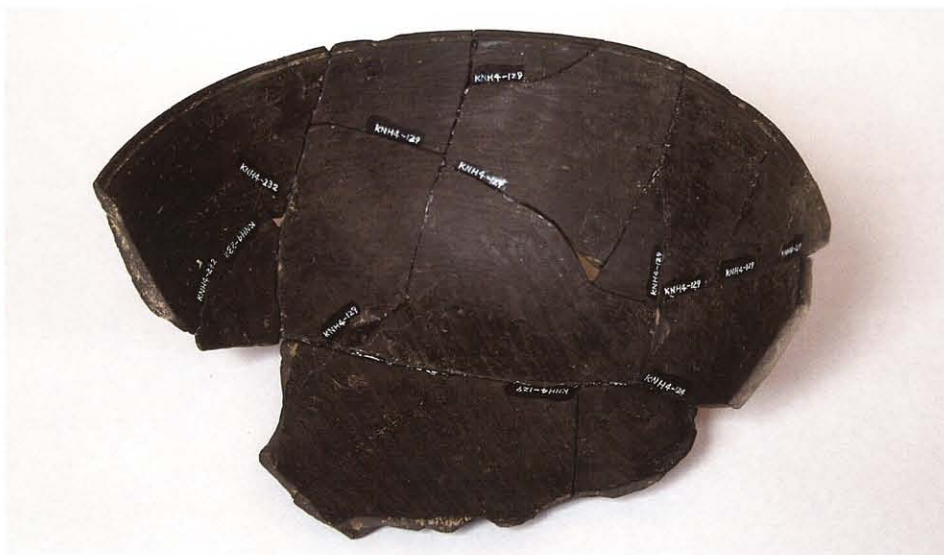


2008年3月

まんのう町教育委員会



A) A地区 第4テラス SB01 完掘状況 (北西より)



B) 畿内産黒色土器碗

序 文

まんのう町は、香川県の南西部に位置し、讃岐山脈の山並みを背景にした水と自然に囲まれた町です。町名の由来となっている日本一のため池「満濃池」は、讃岐の水瓶と言われており、古来より多くの恵みをもたらしてきました。

まんのう町教育委員会では地域の貴重な文化財である古代山岳寺院「中寺廃寺跡」の発掘調査を行なっております。このたび、第4次の発掘調査報告書を発行する運びとなりました。

平成19年度はA・B・C地区の追加調査を行いました。その結果、中寺廃寺跡の全貌が一段と明らかになりました。

また、平成16～18年度に実施した調査成果により、平成19年11月16日に国の文化財審議会から文部科学大臣へ中寺廃寺跡の史跡指定について答申が行われました。

最後になりましたが、発掘調査、報告書の作成に際して、各方面より多大なるご協力とご指導を頂きました。ここに深く感謝の意を表しますとともに、今後の発掘調査・遺跡整備に引き続きよろしくご支援賜りますようお願い申し上げます。

平成20年3月

まんのう町教育委員会

教育長 尾 鼻 勝 吉

例 言

1. 本書は、まんのう町教育委員会が文化庁と香川県の文化財補助金を受けて平成19年度国庫補助事業として実施した、香川県仲多度郡まんのう町造田3469-2他に所在する中寺廃寺跡の発掘調査報告書である。
2. 発掘調査から報告書の作成はまんのう町教育委員会が行った。
3. 本書の実測図の縮尺はすべてスケールで表示した。また図中の方位・座標は国土座標第Ⅳ系（世界測地系）による。標高はT. P.（東京湾平均海面）からのプラス値である。座標・標高の記載はすべてm単位である。
4. 出土遺物・写真・図面等の調査成果物はまんのう町教育委員会にて保管している。
5. 挿図の一部に国土地理院発行5千分の1国土基本図を複製した琴南町全図（承認番号四複第238号）及び、国土地理院発行2万5千分の1地形図「内田」を一部改変して使用した。
6. 遺構は下記の略号によって表示している。
SP 柱穴 SB 掘立柱建物跡 SD 溝状遺構 SK 土坑
7. 調査の実施から本書の執筆に至るまでは、以下の方々や諸機関のご指導・ご協力を頂きました。記してお礼申し上げます。

伊賀正法・上原真人・片桐孝浩・木原溥幸・桐生直彦・坂井秀弥・菅原良弘・鈴木信男・
丹羽佑一・信里芳紀・藤好史郎・松本豊胤・森 格也・渡部明夫
香川県埋蔵文化財センター・香川県歴史博物館・まんのう町文化財保護協会

（敬称略・五十音順）

目 次

表紙写真 中寺廃寺跡遠景（南東より）

1. 遺跡の環境	(1)
(1)遺跡の立地	
2. 調査の概要	(4)
(1)調査の経緯 (2)中寺廃寺跡調査・整備組織 (3)調査の経過 (4)周知と活用	
3. 遺構	(6)
(1)概要	
(2)A地区 第4テラス	①平坦地の造成 ②掘立柱建物跡SB01
	③被熱面 ④溝状遺構SD01
(3)A地区 第1テラス	①平坦地の造成 ②検出遺構
(4)A地区 第10テラス	①平坦地の造成 ②検出遺構
(5)A地区 里道	①道の造成
4. 遺物	(21)
(1)概要 (2)A地区第4テラス出土遺物 (3)A地区第1テラス出土遺物	
5. まとめ	(27)
(1)中寺廃寺跡A地区の検討	
①はじめに ②第2・3テラスの状況 ③第1・4・10テラス及び里道の状況	
④A地区の意義について	
(2)中寺廃寺跡付近の道について	
①はじめに ②中寺廃寺跡付近の道 ③各道の性格の検討 ④今後の課題	

挿 図 目 次

第1図 中寺廃寺跡 位置図	第9図 A地区 第10テラス 平・断面図
第2図 中寺廃寺跡 平坦地分布図	第10図 A地区 里道 断面図
第3図 A地区 調査区位置図	第11図 A地区 第4テラス 出土遺物実測図(1)
第4図 A地区 第4テラス 断面図	第12図 A地区 第4テラス 出土遺物実測図(2)
第5図 A地区 第2～4テラス 平面図	第13図 A地区 第4テラス 出土遺物実測図(3)
第6図 A地区 第4テラスSB01 平・断面図	第14図 A地区 第1テラス 出土遺物実測図
第7図 A地区 第1テラス 平面図	第15図 絵図中の築竈
第8図 A地区 第1テラス 断面図	第16図 中寺廃寺跡付近の道

表 目 次

第1表 中寺廃寺跡出土遺物観察表(1)土器

第2表 中寺廃寺跡出土遺物観察表(2)石製品

写 真 図 版 目 次

図版1. A) A地区 第4テラス S B01 完掘状況(北西より) B) 畿内産黒色土器椀

図版2. A地区 第4テラス

A) S B01 完掘状況(北西より) D) S D01 完掘状況(東より)

B) S B01 完掘状況(北東より) E) 全景 完掘状況(北より)

C) S B01 床面被熱面(東より)

図版3. A) S P02 断面(北より) E) 遺物38 出土状況(南より)

B) S P03 断面(北より) F) 遺物49 出土状況(南より)

C) S P09 断面(西より) G) 遺物34・44 出土状況(南より)

D) S P09 断面(北より) H) S D01 断面(西より)

図版4. A地区第1テラス

A) トレンチA-A' (東より) D) トレンチC-C' (西より)

B) トレンチA'-A'' (東より) E) トレンチC-C' 溝状遺構(西より)

C) トレンチC-C' (東より) F) トレンチC-C' 溝状遺構(北東より)

図版5. A地区第10テラス

A) 全景 完掘状況(北より) C) 柱穴群 完掘状況(西より)

B) S K01 完掘状況(東より)

A地区里道

D) トレンチ全景(北西より) E) トレンチ全景(南西より)

図版6. A) A地区 第4テラス 出土遺物1~12(内面)

B) A地区 第4テラス 出土遺物1~12(外面)

図版7. A) A地区 第4テラス 出土遺物13~28(内面)

B) A地区 第4テラス 出土遺物13~28(外面)

図版8. A) A地区 第4テラス 出土遺物29~44(内面)

B) A地区 第4テラス 出土遺物29~44(外面)

図版9. A) A地区 第4テラス 出土遺物45~52(内面)

B) A地区 第4テラス 出土遺物45~52(外面)

図版10. A) 土師器椀48(内面) D) 土師器椀48底部(外面)

B) 土師器椀48(外面) E) 黒色土器椀49(内面)

C) 土師器椀48底部(内面) F) 黒色土器椀49(外面)

図版11. A) A地区 第4テラス 出土遺物53~63、A地区 第1テラス 出土遺物64~66(内面)

B) A地区 第4テラス 出土遺物53~63、A地区 第1テラス 出土遺物64~66(外面)

1. 遺跡の環境

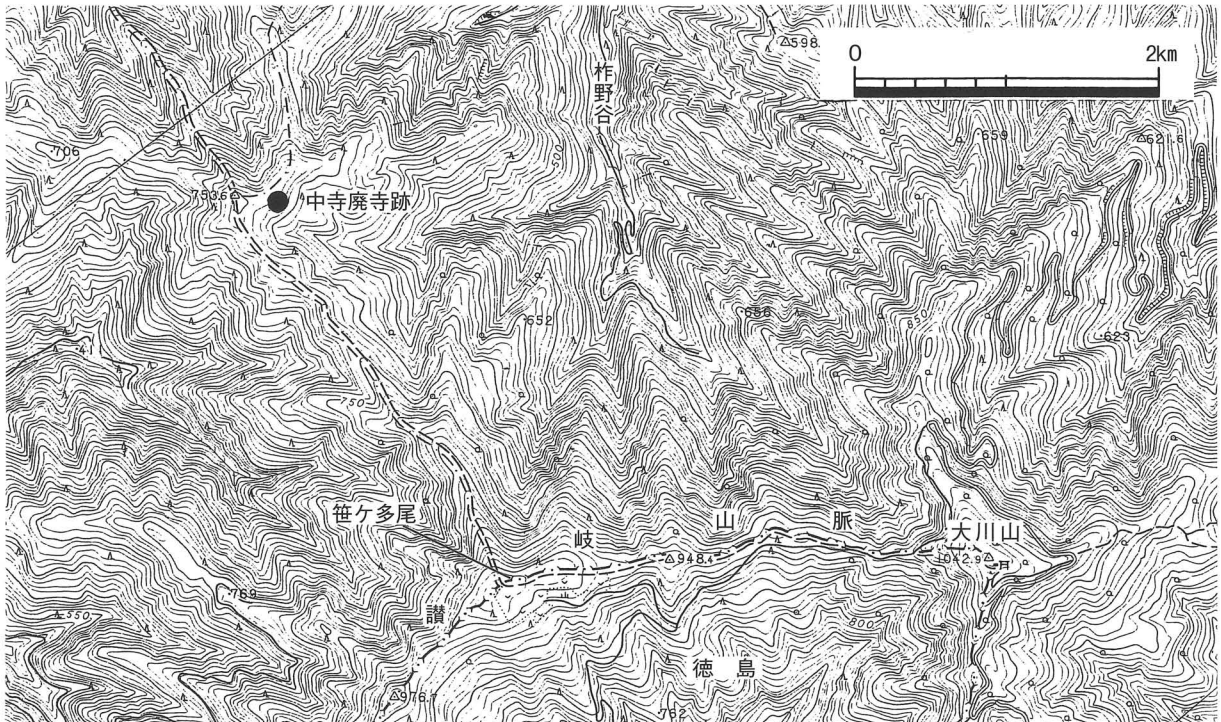
(1) 遺跡の立地

まんのう町は、香川県仲多度郡の3町（満濃町、仲南町、琴南町）が、平成18年3月20日に合併して誕生した新町である。香川県南西部に位置し、面積は約194.17km²である。町内には約1000ヶ所のため池が点在しており、町名の由来となっている日本一の灌漑用ため池『満濃池』がある。町の南端には標高1,000mを超える竜王山、大川山を主峰とする讃岐山脈が連なり、そのふもとを県下で唯一の一級河川である土器川が流れている。まんのう町南部の仲南・琴南地区は山深い地域でありながら、金毘羅街道の一つである阿波街道の阿讃国境の村として、古くから開かれた地域であり、借耕牛、通婚圏、商業圏などにおいて香川の中でも徳島との関係が深い地域である。

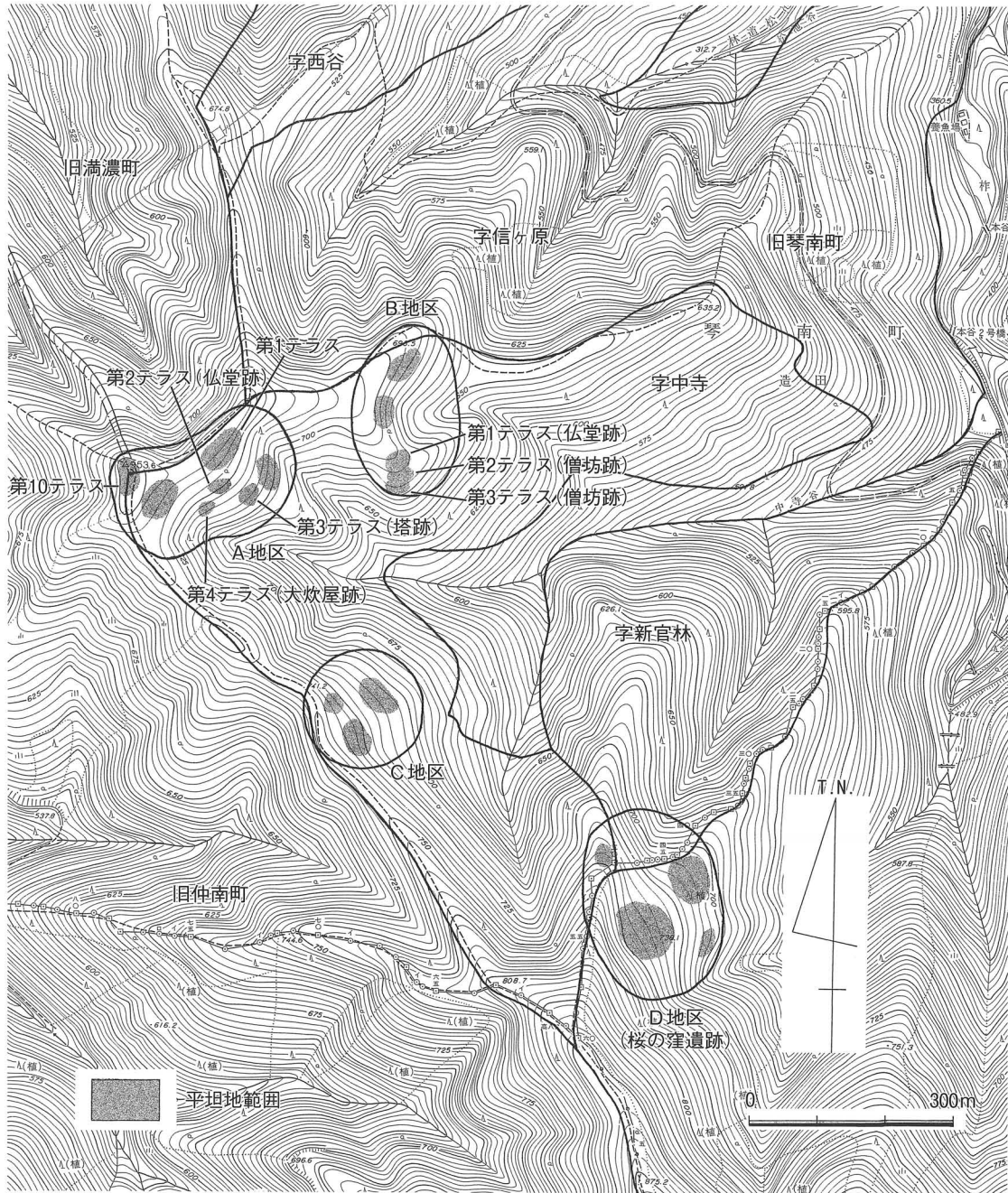
中寺廃寺跡は、香川・徳島県境の讃岐山脈から尾根伝いに北西へ約3km離れた、標高650～700mに所在する。付近の尾根上には旧行政区画である満濃町・仲南町・琴南町が接する三角点があり、そこからは満濃池を初めとし、香川県内の平野を一望できる。また、遺跡付近には徳島県と満濃地区江畑・仲南地区塩入・琴南地区杵野をつなぐ尾根沿いの道の結節点があり、近代以前頻繁に交通が行なわれていたことを聞き取り調査で確認している。

中寺廃寺跡を構成する平坦地は南東に開けた谷を囲み、西のA地区、北のB地区、南のC地区、南西のD地区に分布する。平坦地はすべて谷の懐側に所在しており、尾根が風防の役割を果たすと考えられる。谷の開けた南東側には古くから信仰されてきた大川神社の御神体である、大川山を望むことができる。

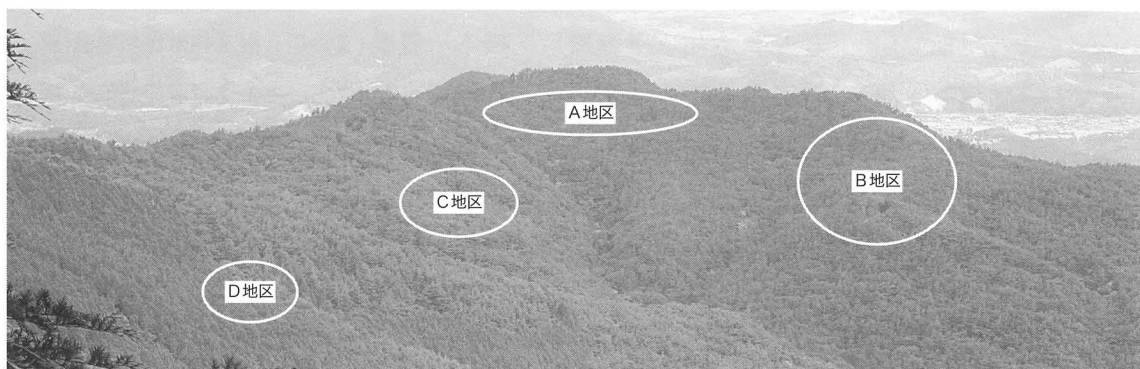
以上のように中寺廃寺跡は、香川・徳島の交流路上の要所に信仰の対象である大川山を望み、防風に適する谷の懐に立地する。このように俗世と一定の距離を置きながら、交通の要所に位置し、修行に適した場所であることが、当地に中寺廃寺跡が立地した要因と考えられる。



第1図 中寺廃寺跡 位置図



第2図 中寺廃寺跡 平坦地分布図



中寺廃寺跡 平坦地分布状況 (南東より)

2. 調査の概要

(1) 調査の経緯（第1・2図参照）

調査地付近は、「中寺」「信が原」「鐘が窪」「松地谷」という寺院関係の地名が所在すること、寛政11(1799)年に記された『讃岐廻遊記』中に「中寺」の表記があること、大川七坊といわれる寺院が山中に所在したと近隣集落において伝承されることより、寺院の存在を示唆されていた。しかし寺院の詳細が記された文献は未確認であり、中寺廃寺跡は長らく幻の寺院であった。

昭和56年に中寺廃寺跡付近の分布調査を実施し、現在のA地区付近において数箇所の平坦地を発見した。続いて昭和59年にはボーリング棒による調査を実施し、第2テラスで礎石を確認した。また第3テラスにおいては試掘調査により塔跡を確認した。塔心礎石の下部からは地鎮・鎮壇具と想定される10世紀前半の遺物が出土し、10世紀前半に塔が建立されたことを確認した。平成15年度は字中寺全域の^{あざ}詳細分布調査を行い、約1,000mの範囲に遺跡が展開していることが判明した。また、遺跡は大きく4つの地区に分けることが可能であり、A～D地区とした。平成16年度からは中寺廃寺跡調査・整備委員会を組織し、長期計画に基づき本格的な調査を実施した。平成16年度はA地区において塔跡・仏堂跡の発掘調査を実施した。その結果、A地区は10～11世紀における中寺廃寺跡の中心的な地区であることを確認した。また、文献調査の成果により19世紀前半には寺がすでに名称不明の状態であり、現在のD地区の位置に寺跡があると伝承されていたことを確認した。平成17年度はB地区において、仏堂跡・僧坊跡の発掘調査を実施した。その結果、僧坊跡から西播磨産須恵器多口瓶が出土し、僧坊跡に伴う排水溝より越州窯系青磁碗が出土し、中寺に関わる人々が広い範囲の人々との交流を持っていたことを確認した。平成18年度はC地区において、石組遺構の調査を実施した。その結果、石組遺構は平安時代の石塔である可能性が高いと考えた。以上の成果により、中寺廃寺跡は異なる機能を持った施設が向かい合って立地するという状況を確認した。

(2) 中寺廃寺跡調査・整備組織

調査指導 中寺廃寺跡調査・整備委員会

委員 上原 真人(考古学 京都大学大学院教授) 鈴木 信男(まんのう町文化財保護審議会 会長)
丹羽 佑一(考古学 香川大学教授) 松本 豊胤(まんのう町文化財保護協会 副会長)
木原 溥幸(文献史学 徳島文理大学教授) 菅原 良弘(まんのう町文化財保護協会 副会長)
栗田 隆義(まんのう町 町長) 尾鼻 勝吉(まんのう町教育委員会 教育長)

オブザーバー 森 格也(香川県教育委員会生涯学習・文化財課 主任)

調査担当 まんのう町教育委員会 中寺廃寺発掘調査室

総 括 雨霧 弘

調査担当者 加納 裕之

調査補助員 中村 文枝 平井 佑典

(3) 調査の経過

平成19年度は主に中寺廃寺跡A地区において発掘調査を行い、また中寺廃寺跡全体の地形測量及びB・C地区の追加調査を行った。春から秋にかけて現地作業を実施し、冬季は報告書作成期間とした。現地作業のうちA地区の調査は4月下旬より開始し、6月1日以降は国庫補助対象事業として進め11月下旬まで実施した。B地区の追加調査は9月下旬より開始し11月上旬まで実施した。C地区の追加調査は7月下旬より開始し、8月上旬まで実施した。また、7月上旬から下旬にかけて中寺廃寺跡全体の地形測量を業者に委託した。調査終了後に調査区の埋め戻しを行い、12月4日に終了した。その後第5回調査・整備委員会を2月16日に実施し、今年度調査成果の報告と検討を行った。整理作業は遺物・図面の整理作業を発掘調査と平行して進め、発掘調査終了後に報告書掲載図面の整理・浄書を行い、2月から3月にかけて報告書印刷を業者へ委託した。また、7月中旬には平成16～18年度の調査成果をまとめたまんのう町内遺跡発掘調査報告書第3集を発行した。

(4) 周知と活用

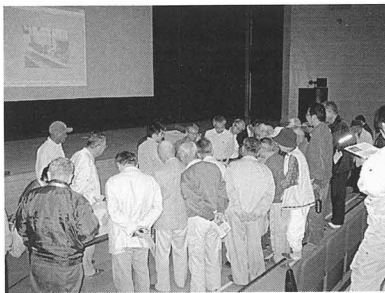
調査と併行して中寺廃寺跡の周知化と活用を図るべく、調査成果説明会や町文化祭での展示等を実施した。以下、見学会・視察・研修など主だった事項を掲載する。

【平成19年度】

- 4月19日 まんのう町立琴南中学校遠足「大川山～中寺廃寺跡ハイキング」 27名
- 6月4日 まんのう町文化財保護協会琴南支部総会において講演 40名
- 7月30日 まんのう町立琴南小学校教員現地見学 8名
- 10月27日 平成19年度調査成果説明会 60名（雨天のため屋内で説明会を実施）
- 11月9日 調査・整備委員会上原真人委員現地視察
- 11月17・18日 まんのう町文化祭にて文化財展「まんのう町のあけぼの」開催
- 12月11日 琴南ふるさと資料館にて琴南小学校6年生中寺廃寺跡展示説明 30名
- 2月12日 香川県高等学校地歴公民科研究会歴史部会において講演 40名



4月19日琴南中学校遠足



10月27日調査成果説明会



11月17・18日文化祭展示

3. 遺構

(1) 概要（第3図参照）

平成19年度発掘調査はA地区の第1・4・10テラス及び里道を対象とした。A地区は中寺廃寺跡が位置する南東へ開けた谷懐の最奥で確認した地区である。A地区については昭和59年度と平成16年度に発掘調査を実施し、第2テラスにおいて仏堂跡、第3テラスにおいて塔跡と考えられる遺構を確認している。A地区は10世紀前半～11世紀にかけて中寺廃寺の中樞伽藍が存在した地区と考えられる。

A地区の発掘調査の結果、第4テラスにおいては3間×2間の掘立柱建物跡1棟と溝状遺構1条を確認した。第1テラスにおいては溝状遺構1条を確認した。第10テラスにおいては柱穴と土坑を確認した。里道では人工的な造成の跡を確認した。

また、A地区調査と平行してB・C地区の追加調査を行なった。B地区第1テラス調査では平成17年度に確認した礎石建物跡の西隣において平坦地が広がり、遺物が集中して出土することを確認した。C地区の調査では石組遺構の平面図を作成した。

(2) A地区 第4テラス

第4テラスは標高720m前後に位置し、南西に面する約50㎡の平坦地である。過去の調査において仏堂跡・塔跡を確認した第2・3テラスから約30mと近接しており、中寺廃寺跡中心部に関わる遺構が存在する可能性が高いと考え調査を実施した。

調査の結果、桁行3間×梁行2間の掘立柱建物跡を1棟確認した。掘立柱建物跡の床面に被熱・硬化した面を検出した。また、掘立柱建物跡の山側において排水溝と考えられる溝状遺構を確認した。

①平坦地の造成（第4図参照）

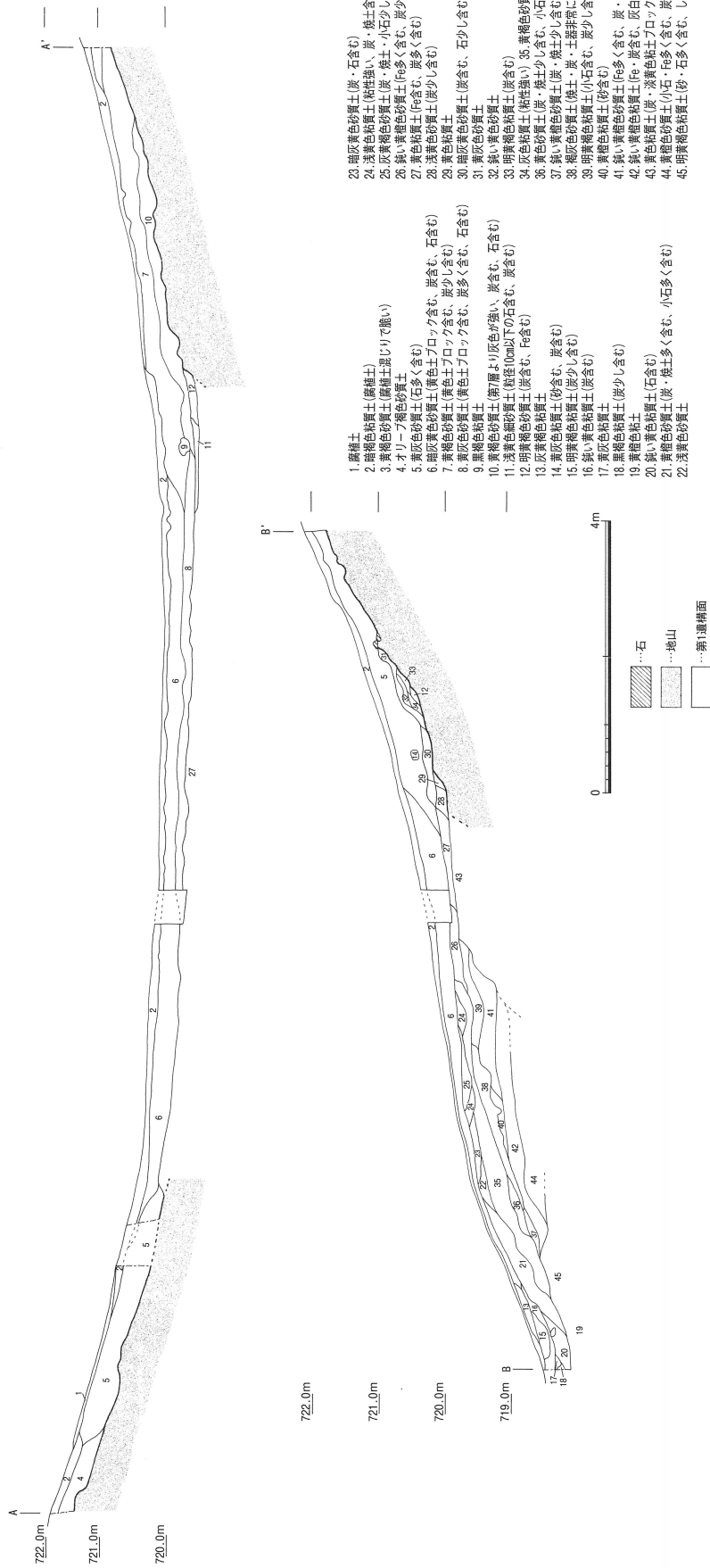
第4テラスは中寺谷の最奥部、A地区第1～3テラスを擁する東方向へ突出する尾根の側面に形成された、南西に開く浅い谷部に立地する。山側の地山を岩盤まで掘削し、谷側は数段階に盛土を積み上げ平坦地を造成する。平坦地は発掘調査範囲外においても南西方向へ延びており、他の建物跡が存在する可能性が考えられる。

平坦地周辺の斜面勾配は山側法面が29°、平坦地部分が5°、谷側法面が26°である。谷側法面の角度により当時の平坦地はもっと広がったと考えられ、第4テラスを造成していた盛土の多くは流失したものと考えられる。

平坦地を造成する盛土は上位の盛土と下位の盛土に別れる。後述する掘立柱建物跡SB01は上位の盛土が造成された段階で建てられたと考えられる。また、上位・下位の盛土中からは炭化物・焼土粒・土器片を確認しており、上位の盛土が造成される以前にSB01に先行する建物が所在した可能性が高い。



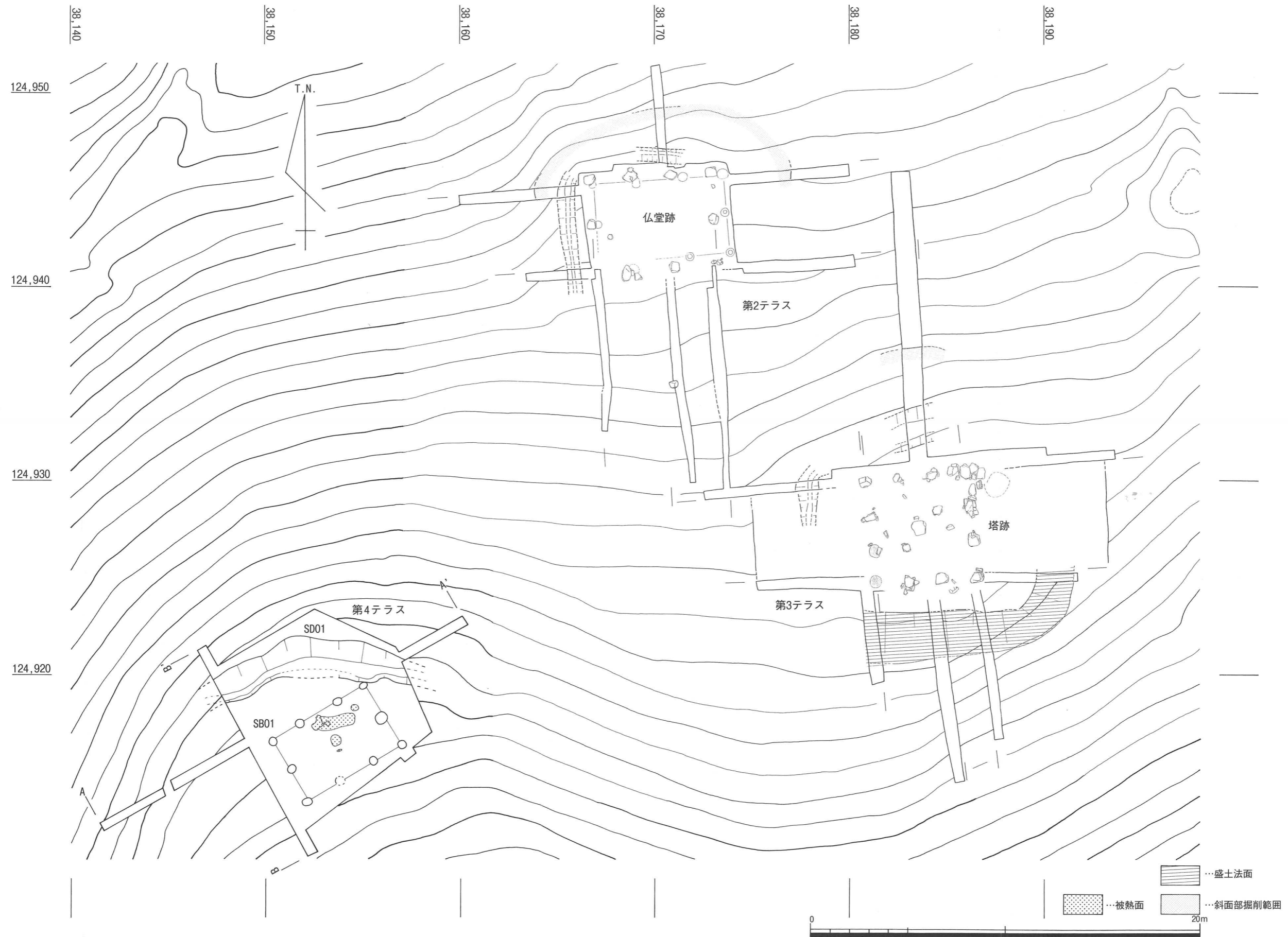
第3図 A地区 調査区位置図



1. 腐植土
2. 暗褐色粘質土(腐植土)
3. 暗褐色粘質土(腐植土混じりで軽い)
4. オリーブ褐色粘質土
5. 黄灰色粘質土(石多く含む)
6. 暗灰色粘質土(黄色土ブロック含む、炭含む、石含む)
7. 黄褐色粘質土(黄色土ブロック含む、炭少し含む)
8. 黄褐色粘質土(黄色土ブロック含む、炭多く含む、石含む)
9. 黄褐色粘質土
10. 黄褐色粘質土(新層より灰色が強い、炭含む、石含む)
11. 黄褐色粘質土(新層より灰色が強い、炭含む、石含む)
12. 暗褐色粘質土(粘性強い)
13. 暗褐色粘質土(粘性強い)
14. 暗褐色粘質土(粘性強い)
15. 暗褐色粘質土(粘性強い)
16. 暗褐色粘質土(粘性強い)
17. 暗褐色粘質土(粘性強い)
18. 暗褐色粘質土(粘性強い)
19. 暗褐色粘質土(粘性強い)
20. 暗褐色粘質土(粘性強い)
21. 暗褐色粘質土(粘性強い)
22. 暗褐色粘質土(粘性強い)

23. 暗褐色粘質土(炭・石含む)
24. 暗褐色粘質土(粘性強い、炭・焼土含む)
25. 暗褐色粘質土(炭・焼土・小石少し含む)
26. 暗褐色粘質土(炭・焼土・小石少し含む)
27. 暗褐色粘質土(炭・焼土・小石少し含む)
28. 暗褐色粘質土(炭・焼土・小石少し含む)
29. 暗褐色粘質土(炭・焼土・小石少し含む)
30. 暗褐色粘質土(炭・焼土・小石少し含む)
31. 暗褐色粘質土(炭・焼土・小石少し含む)
32. 暗褐色粘質土(炭・焼土・小石少し含む)
33. 暗褐色粘質土(炭・焼土・小石少し含む)
34. 暗褐色粘質土(炭・焼土・小石少し含む)
35. 暗褐色粘質土(炭・焼土・小石少し含む)
36. 暗褐色粘質土(炭・焼土・小石少し含む)
37. 暗褐色粘質土(炭・焼土・小石少し含む)
38. 暗褐色粘質土(炭・焼土・小石少し含む)
39. 暗褐色粘質土(炭・焼土・小石少し含む)
40. 暗褐色粘質土(炭・焼土・小石少し含む)
41. 暗褐色粘質土(炭・焼土・小石少し含む)
42. 暗褐色粘質土(炭・焼土・小石少し含む)
43. 暗褐色粘質土(炭・焼土・小石少し含む)
44. 暗褐色粘質土(炭・焼土・小石少し含む)
45. 暗褐色粘質土(炭・焼土・小石少し含む)

第4図 A地区 第4テラス 断面図



第5図 A地区 第2~4テラス 平面図

②掘立柱建物跡SB01（第6図参照）

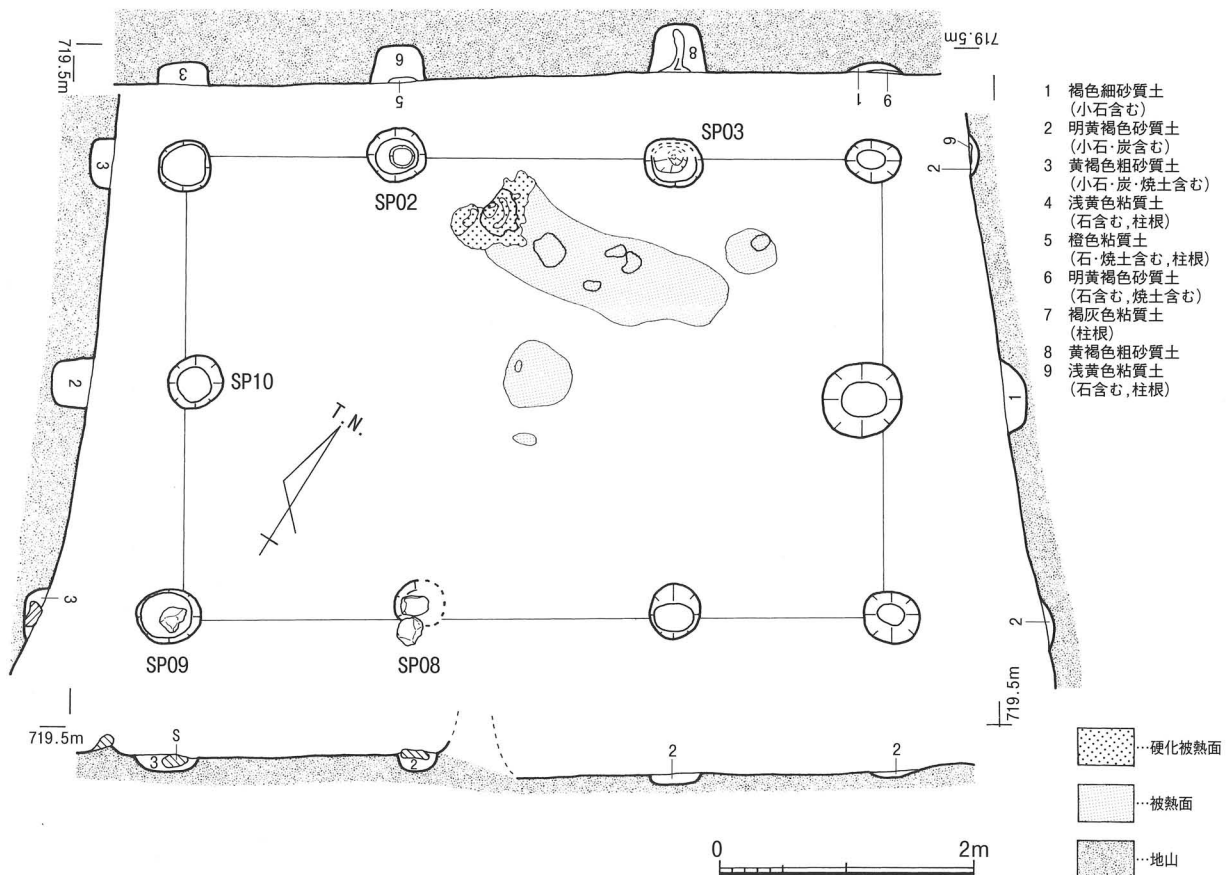
盛土上面及び地山上面において、桁行3間×梁行2間の掘立柱建物跡を構成する柱穴を10穴検出した。建物跡の方位は梁行方向の柱穴列がN-31°-Eで南東を向く。第2テラスにおいて確認した仏堂跡がN-5°-E、第3テラスにおいて確認した塔跡がN-6°-Eで南を向くことからすると、第4テラスには仏堂跡・塔跡と方位をそろえず、地形に制約された向きに建物が建てられたと考えられる。

建物跡の幅は桁行約5.5m、梁行約3.6mであり、床面積は約20㎡である。桁行中央の柱の間隔は約5.3mを測り、約20cm短くなる。桁行中央の柱が桁行に比べて短い状況は、隣接するA地区第2テラスにおいて確認した掘立柱建物跡と共通する。

梁行における各柱穴の間隔は約1.8~1.9mで統一されるが、桁行における各柱穴の間隔は中央の1間が約2.0~2.1mとなり、他は約1.7~1.8mで統一される。桁行中央の1間が約20cm広い状況は隣接するA地区第2テラスにおいて確認した掘立柱建物跡と共通する。

建物跡は第1遺構面において検出した（第4図）。従って、盛土造成後に掘立柱建物が構築されたことが確認できる。

土層断面により柱痕を確認できなかったが、柱穴底面において確認した柱が窪んだ痕跡により柱の直径は約15~20cmと想定できる。また、SP08・SP09には根石状の石が確認できた。



第6図 A地区 第4テラスSB01 平・断面図

③被熱面（第6図参照）

SB01床面において被熱面を確認した。被熱面は建物範囲内の山側中央部において確認している。被熱面の北西よりには最も被熱し硬化したと見られる円形状の窪みがある。窪みの周囲は強く被熱したためか白みを帯びた赤褐色を呈する。この窪みを囲むように直径約60cmの範囲の地山面と盛土の一部が被熱・硬化し赤褐色を呈している。さらに、この被熱面から南東に向けて長さ約1.8m・幅約0.6mの帯状の範囲が弱く被熱し、淡い赤褐色を呈している。また、この帯状の被熱範囲の北側と南側にも直径0.4～0.5mの弱く被熱し、淡い赤褐色を呈する円形の範囲が確認できる。また、被熱面付近の流土中には焼土粒・炭粒を多く確認した。

④溝状遺構SD01（第4・5図参照）

掘立柱建物跡SB01の山側、平坦地と斜面部の境界付近において、緩やかに屈曲する溝状遺構SD01を確認した。溝状遺構は調査区北西で約1.3m、調査区北東で約1.2mである。掘立柱建物跡SB01の北隣で溝は太くなり、幅約2.0mを測る。

SD01は土層断面図によると、調査区北東では約10cm程度浅く窪む。調査区北西では確認できなかった。SD01の底面の標高は調査区北西端で約720.3m、調査区北東端で約719.6mであるため、SD01は調査区北西から北東に向かって流れていたと考えられる。建物北西のSD01底面の標高が、SB01床面と考えられる受熱面の標高に比べて若干高くなる。調査区北西では土層が盛土状に水平に堆積している箇所が確認できる（第4図 12・32・33・34層）。従ってSD01と山側斜面部の間に犬走り状の土手が設けられていた可能性も考えられるが、確証は得られない。

(3) A地区 第1テラス

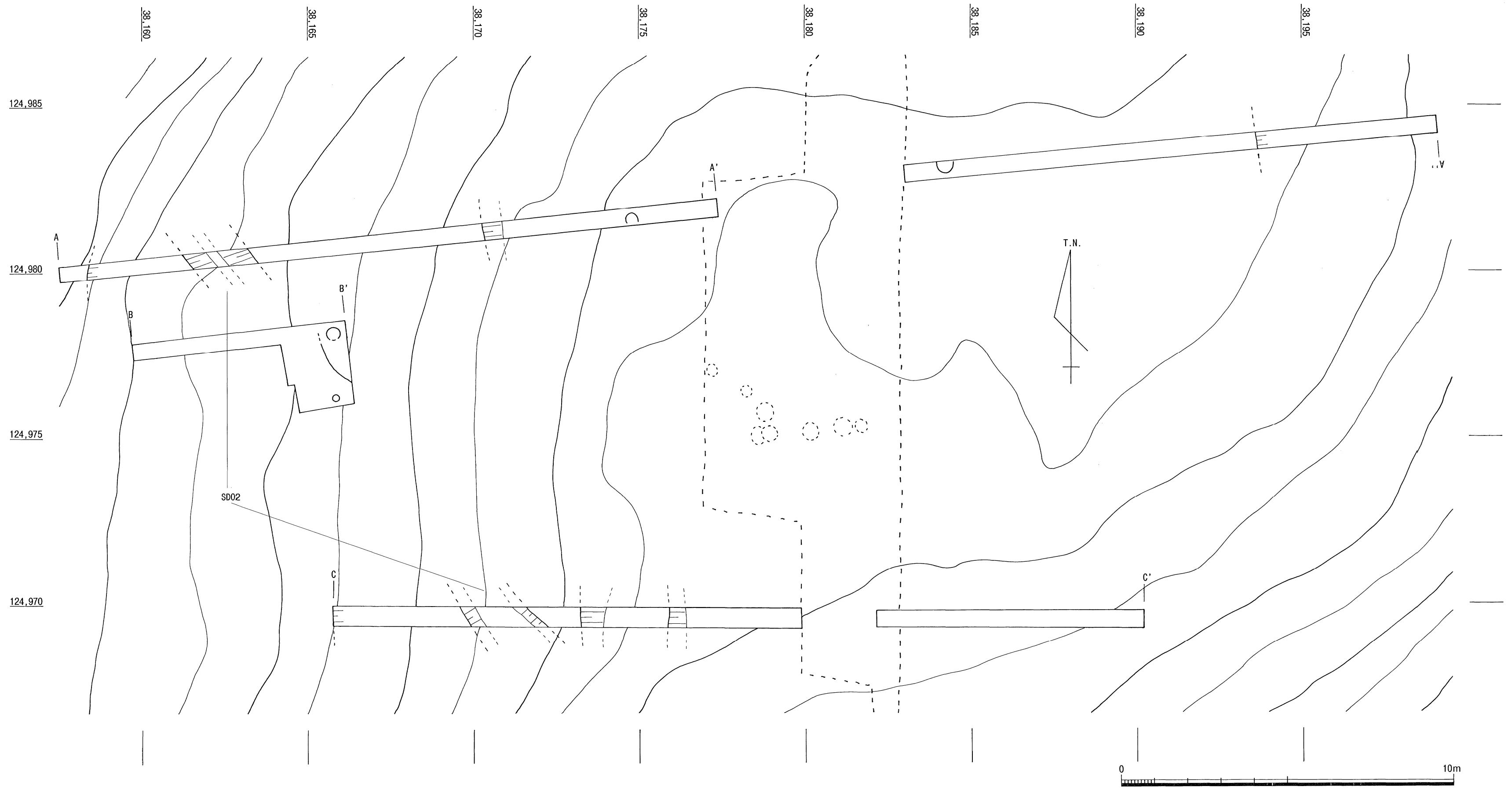
第1テラスは標高733m前後に位置し、南西に面する約900㎡の、A地区において最も面積が広い平坦地である。平成16年度において、第2・3テラスの建物跡と方位がほぼ一致する柱穴列を確認した。また、平坦地造成の段階で混入した旧石器・縄文時代の遺物が出土し、中寺廃寺跡に先行する遺跡の存在を確認した。

平成19年度は平成16年度に設定した南北方向のトレンチに直行する東西方向のトレンチを設定し調査を行った。その結果平坦地南西部を北西から南東に向けて流れる溝状遺構SD02を確認した。

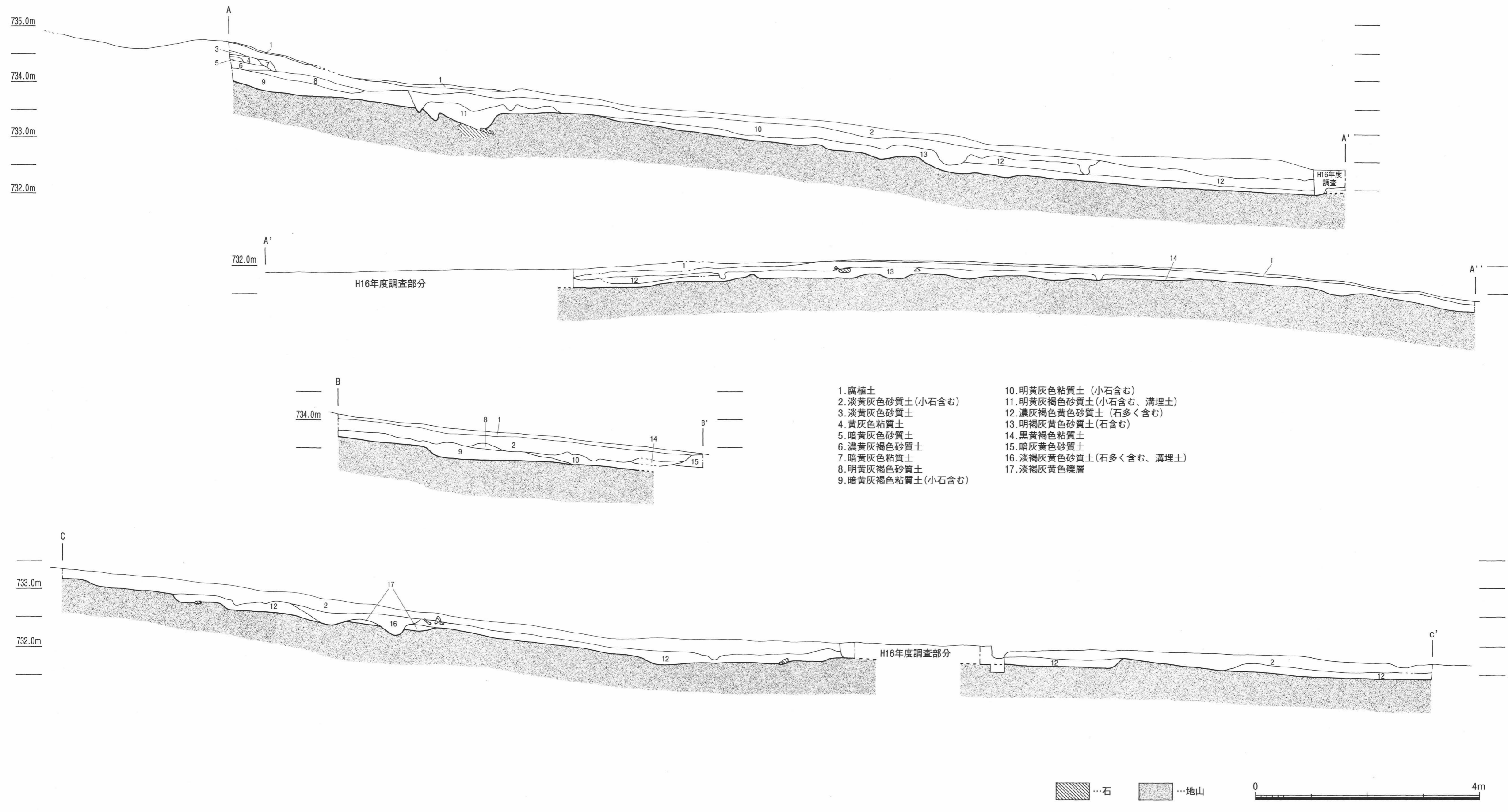
①平坦地の造成（第8図参照）

基本層序は地山、流土、腐植土の順である。平坦地山側斜面部中に地山の上面を切りこみ、溝の埋土が堆積する。

平坦地と山側斜面部の境には一段の落ちがあり、A-A”間における平坦地西端の地山



第7図 A地区 第1テラス 平面図



第8図 A地区 第1テラス 断面図



- | | |
|--------------------|---------------------------|
| 1. 腐植土 | 15. 淡灰黄色砂質土(赤色シルトブロック含む) |
| 2. 暗黄灰色砂質土(腐植土) | 16. 暗赤灰黄色砂質土(赤色シルトブロック含む) |
| 3. 黒褐色粘質土(腐植土) | 17. 灰黄色砂質土(小石含む) |
| 4. 明灰褐色砂質土 | 18. 黄灰色砂質土 |
| 5. 灰黄色砂質土 | 19. 暗灰黄色砂質土 |
| 6. 濃黄灰色砂質土 | 20. 灰黄褐色砂質土 |
| 7. 黄灰色砂質土(小石含む) | 21. 灰橙色砂質土 |
| 8. 暗黄灰色砂質土 | 22. 濁灰黄褐色砂質土 |
| 9. 明灰黄色粘質土(礫多く含む) | 23. 暗灰黄色砂質土(石多く含む) |
| 10. 灰黄褐色砂質土(礫多く含む) | 24. 黒褐色粘質土(炭多く含む) |
| 11. 明灰褐色砂質土(小石含む) | 25. 濃灰黄色粘質土(礫多く含む) |
| 12. 褐灰黄色砂質土(小石含む) | 26. 濃灰黄色粘質土 |
| 13. 明褐灰黄色砂質土 | 27. 灰黄色粘質土(Fe少し含む、しまり良い) |
| 14. 褐黄灰色砂質土 | |

第9図 A地区 第10テラス 平・断面図

面の標高は約732.3m、平坦地東端の地山面の標高は約732.2mである。東西23m間の標高差は約0.1mであることから、第1テラスの平坦地は東西方向はほぼフラットであることが確認できる。平成16年度調査成果によると南北方向の平坦地北端の地山面の標高は732.7m、平坦地南端の地山面の標高は731.7mであった。南北23m点間の標高差は約1mであった。従って第1テラスの平坦地は東西南北ほぼ同じ長さを測り、南方向へ向かい緩やかに下ることが確認できる。

②検出遺構（第7図参照）

遺構検出面において溝状遺構平坦地南西部を北西から南東に向けて流れる溝状遺構SD02を確認した。SD02の底場の標高は、A-A'間において約733.1m、C-C'間において約732.2mであり、溝は北西から南東へ向かって流れていたと思われる。

(4) A地区 第10テラス

第10テラスは標高753m前後に位置する、尾根上の中寺廃寺跡において最も高所に立地する約200㎡の平坦地である。中寺廃寺跡で確認した他の平坦地は南東方向に開けた谷懐に位置するため視界は遮られるが、第10テラスは付近で一番高い山の頂上にあるため地形的には視界を遮る物はなく、平野部への眺望が開ける。

調査はまず十字にトレンチを設定し、その北西側を3角形に拡張した。その結果、柱穴を19穴、土坑を1穴確認した。また、遺物は出土しなかった。

①平坦地の造成（第9図参照）

基本層序は地山、流土、腐植土の順である。平坦地の全面は緩やかに東へ下る地山上に流土が堆積している。地山の上面から柱穴・土坑が掘り込まれている。

②検出遺構（第9図参照）

土坑SK01上には焼土が薄く堆積していた。その他小規模な柱穴を数穴確認した。

(5) A地区 里道

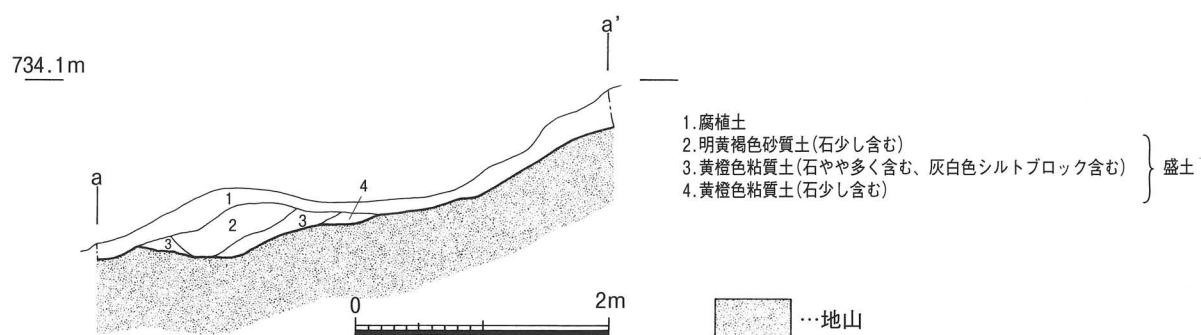
中寺廃寺跡A地区には南西から北東に抜ける里道が通り、各平坦地は里道沿いに立地している。里道が中寺廃寺跡に由来するものかどうか確認するため調査を行なった。

調査を行った箇所は尾根の側面斜面にあたり、幅約0.6mの道が南東から北西へ続く。調査は里道に直交する約4mのトレンチを設定して行い土層堆積状況を確認した。

①道の造成（第3・10図参照）

基本層序は地山、盛土、腐植土の順である。

現在の里道は山側が地山掘削、谷側が盛土により造成されている。盛土中には石が多く混入していることから、山側斜面を掘削した際の廃土を谷側に盛土することで里道を造成したものと考えられる。



第10図 A地区 里道 断面図

4. 遺物

(1) 概要

今年度発掘調査において28ℓコンテナに換算して約4箱分の遺物が出土した。遺物の種類は須恵器・土師器・土師質土器・黒色土器等で、主な時期は10世紀前半～11世紀前半である。また、過去の発掘調査同様瓦は出土しなかった。

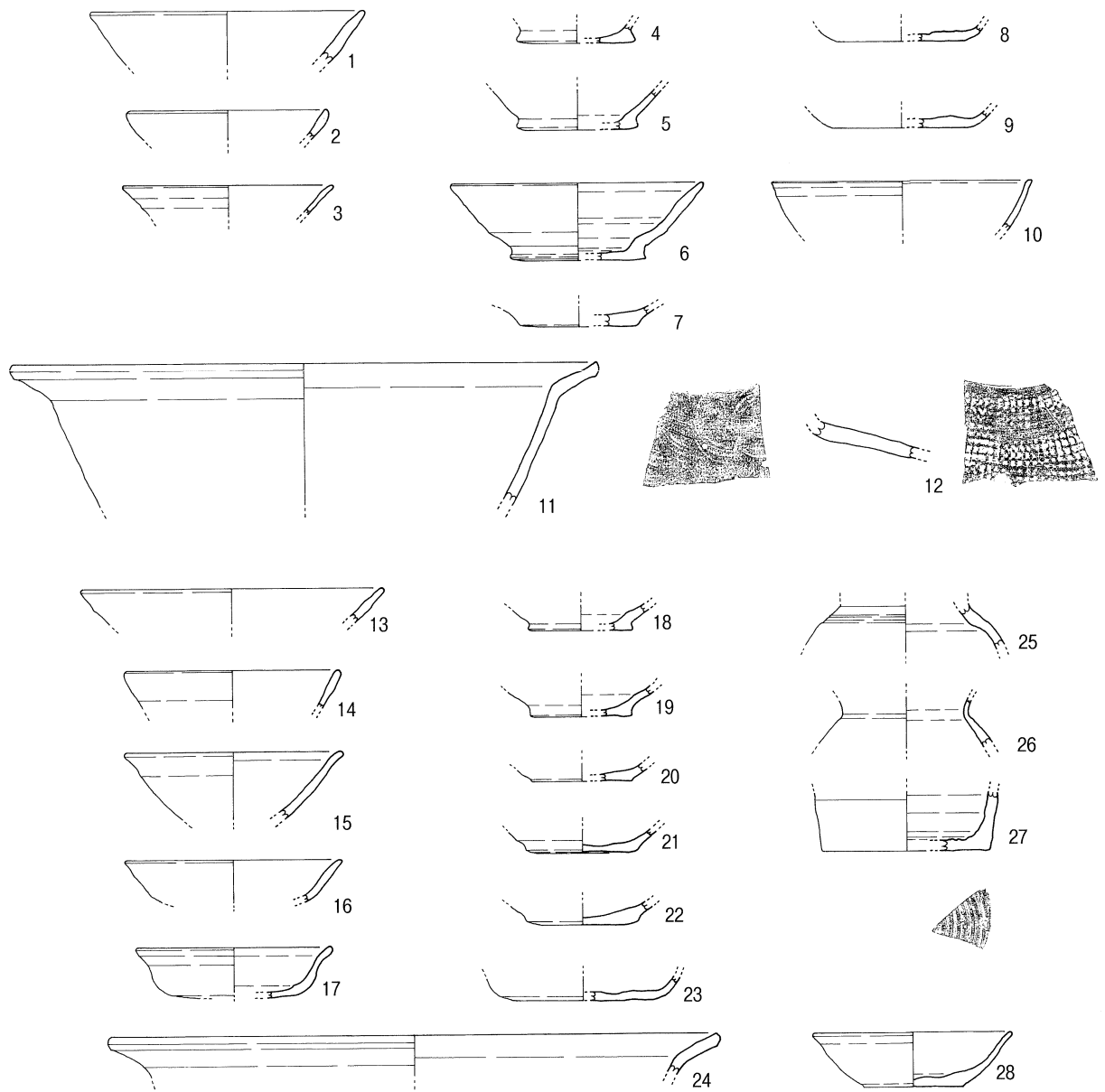
(2) A地区第4テラス出土遺物（第11～13図参照）

第4テラスからは須恵器、土師器、黒色土器等が出土した。遺物は層位ごとに分けて取り上げている。以下出土遺物を下位及び地山直上、中位、上位に分けて記載する。

第11図は下位及び地山直上より出土した遺物である。1～12は地山直上より出土した。13～27は27層より出土した。28は39層より出土した。

1～9は土師器坏である。1～3は体部から口縁部へかけて直線的に外上方へ延びる。4～9は底部を回転ヘラ切りしている。4～6は円盤状高台の底部を持つ。体部下端外面に強いナデを施し、底部が突出する。7は体部下端外面に弱いナデを施し底部が若干突出する。8・9は底部と体部の境に明確な稜を持たず、体部下端はやや内湾しつつ緩やかに外上方に立ち上がる。10は黒色土器碗である。体部から口縁部にかけてはやや内湾しつつ緩やかに外上方に立ち上がる。口縁端部外面にやや強いナデを施す。全面に炭素を吸着させ黒化処理を施す両黒焼成（黒色土器B類）であるが、磨耗が激しく調整等は確認できない。11は土師質土器土鍋である。体部が浅く洗面器状を呈するもので、頸部は「く」の字形に外反する。12は須恵器甕である。肩部外面に格子状のタタキを施す。13～23は土師器坏である。13・14は体部から口縁部へかけて直線的に延びる。15・16は口縁端部が若干外反する。17～23は底部を回転ヘラ切りしている。17は底部と体部の境に明確な稜を持たず、体部下端はやや内湾しつつ緩やかに外上方に立ち上がる。体部から口縁部にかけては外反しつつ緩やかに外上方へ延びる。18・19は円盤状高台の底部を持つ。体部下端外面に強いナデを施し、底部が突出する。20～21は体部下端外面に弱いナデを施し底部が若干突出する。22は底部と体部の境に明確な稜を持たず、体部下端はやや外反しつつ緩やかに外上方に立ち上がる。23は底部と体部の境に明確な稜を持たず、体部下端はやや内湾しつつ緩やかに外上方に立ち上がる。24は土師質土器土鍋である。頸部は「く」の字形に外反する。体部が浅く洗面器状を呈するものと考えられる。25・26は須恵器壺である。体部から頸部にかけての破片である。27は須恵器壺である。底部は回転糸切りしている。須恵器壺は器形・製作技法・胎土より京都府亀岡市に所在する篠窯で生産されたと考えられる。28は土師器坏である。底部は回転ヘラ切りで、底部と体部の境に明確な稜をもつ。体部下半はやや内湾しつつ立ち上がり、体部上半から口縁部にかけて直線的に外上方へ延びる。

遺物の時期は1～23、25～28が10世紀前半～11世紀前半の範疇に収まる。24が13世紀の範



第11図 A地区 第4テラス 出土遺物実測図(1) 0 10cm

罍に収まる。

第12図は中位より出土した遺物である。29は21層より出土した。30は23層より出土した。131～52は35層より出土した。

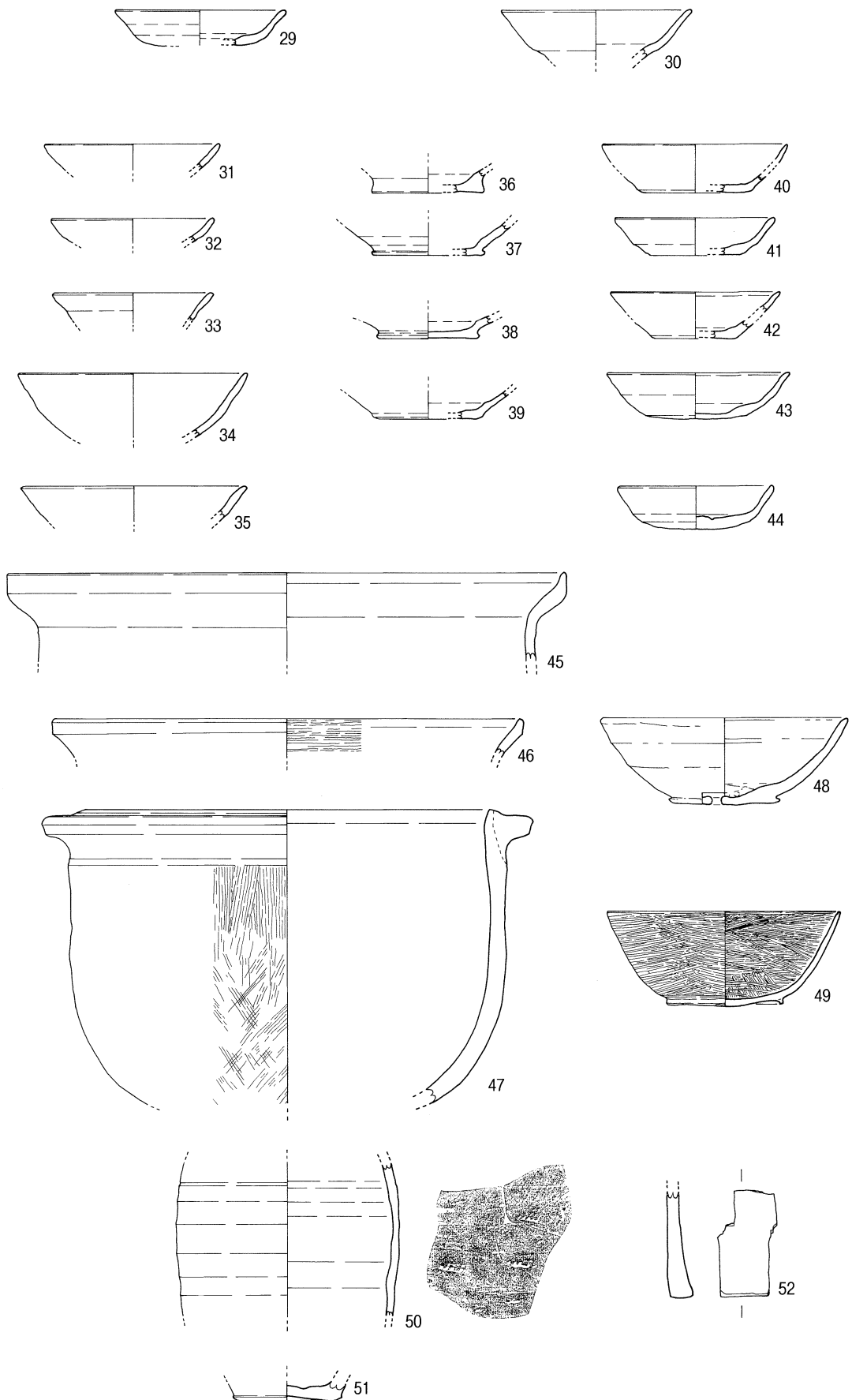
29～44は土師器坏である。29、36～44は底部を回転ヘラ切りしている。29は底部と体部の境に明確な稜を持たず、体部下半はやや内湾しつつ緩やかに外上方に立ち上がる。体部から口縁部にかけては直線的に外上方へ延びる。30は体部下半はやや内湾しつつ緩やかに外上方に立ち上がる。体部上半から口縁部にかけては直線的に外上方へ延びる。31～35は体部から口縁部にかけて直線的に外上方へ延びる。34は体部下半が緩やかに内湾するため、椀となる

可能性がある。36は円盤状高台の底部を持つ。体部下端外面に強いナデを施し、底部が突出する。37・38は体部下端外面に細く強いナデを施し、底部が突出する。39～41は体部下端外面に弱いナデを施し底部が若干突出する。40・41は体部から口縁部にかけてやや内湾しつつ緩やかに外上方へ延びる。42は底部と体部の境に明確な稜をもち、体部から口縁部にかけては直線的に外上方へ延びる。43・44は底部と体部の境に明確な稜を持たず、体部下半はやや内湾しつつ緩やかに外上方に立ち上がる。体部から口縁部にかけては直線的に外上方へ延びる。45・46は土師質土器長胴甕である。45は頸部の内面に明確な稜を持たず「く」の字状に外反し、口縁端部は上方につまみ出している。46は口縁端部を上方につまみ出している。口縁部内面には横方向の刷毛目を施す。47は土師質土器土釜である。太めの鐙がつき、口縁部は非常に短く鐙とほぼ一体化している。体部の外面には縦方向の刷毛目が施される。48は土師器椀である。底部を回転ヘラ切りし、体部下端外面に細く強いナデを施し、底部が突出する。体部から口縁部にかけてやや内湾しつつ緩やかに外上方に立ち上がる。底部には直径約6mmの穴があり、断面の形状より焼成前に内側から外側へ向かって穿孔したと考えられる。底面の穴付近には穿孔の際にはみ出た粘土をヘラ状の工具で拭って調整した痕跡が残る。体部下半内面及び口縁部の一部には熱を受けて暗灰褐色となる部分があり、灯明皿として使用された痕跡と考えられる。49は黒色土器椀である。底部には「ハ」の字状に開く細い輪高台が付く。体部下半は緩やかな曲線を描いて外上方へ立ち上がり、体部上半は直線的に外上方へ伸びる。口縁端部内面には1条の沈線を巡らせる。器表面全体には底部外面も含めて幅約2mmのヘラ磨きを緻密に施す。全体に炭素を吸着させ黒化処理を施す両黒焼成（黒色土器B類）である。県内出土の黒色土器とは器形・製作技法に差異が認められ、搬入品と考えられる。高台の形状と内湾する深い底部より畿内系V類と考えられる。50・51は須恵器壺である。50は体部で外面には格子状工具の痕跡が残る。51は底部で外面に繊維質の圧痕が残る。52は砥石である。流紋岩製で表と裏面が研磨されている。

29～52の遺物の時期は10世紀前半～11世紀の範疇に収まる。

第13図は上位及びその他より出土した遺物である。53～56は5層より出土した。57・58は20層より出土した。59・60は排土中より確認した。61・62はSB01を構成するSP10の2層より出土した。63は5・25・27・35層より出土した。

53～55は土師器坏である。底部を回転ヘラ切りしている。53・54は円盤状高台の底部を持つ。体部下端外面に強いナデを施し、底部が突出する。55は体部下端外面に弱いナデを施し底部が若干突出する。56は須恵器甕である。体部外面に格子タタキ目、内面には同心円状の当て具痕が認められる。57は土師器坏である。底部を回転ヘラ切りしている。底部と体部の境に明確な稜を持たず、体部下半は直線的に外上方へ立ち上がる。口縁端部はやや外反し外上方へ伸びる。58は土師質土器の甕である。頸部は「く」の字状に屈曲し、体部はやや浅い形状を呈する。59は須恵器坏である。底部には外下方へふんばる形状の高台がつく。60・61



第12図 A地区 第4テラス 出土遺物実測図(2)



は土師器坏である。底部を回転ヘラ切りしている。60は底部と体部の境に明確な稜を持ち、体部は直線的に外上方に立ち上がり、口縁部へ延びる。61は体部下端外面に弱いナデを施し底部が若干突出する。体部は直線的に外上方に立ち上がり、口縁部へ延びる。62は須恵器甕の体部破片を利用した転用硯である。外面には格子タタキ目、内面には磨耗した同心円状の当て具痕が認められる。63は須恵器多口瓶である。体部の外面はタタキを施した後横ナデを施し、内面は横ナデを施す。肩部には2条の突帯を接合する。上位の突帯は下方の角が外方に若干つまみ出す方形の断面を呈し、下位の突帯はさらに強く下方の角を外方へつまみ出す五角形の断面を呈する。上位の突帯の内面には指頭圧痕、下位の突帯の内面には強い横ナデがそれぞれ確認できることから、内面を押さえながら突帯を接合・整形したと考えられる。下位の突帯の一部に上から粘土を貼り付けた箇所があり、小口縁部を接合した際の粘土と見られるため、多口瓶であると判断した。口縁部はゆるく外反して口縁端部上端を上方につまみ上げ、口縁端部下端を下方に引き出す。体部外面には窯内の降灰による自然釉が外面の一部に付着する。須恵器多口瓶は器形・製作技法・胎土より西播磨産と考えられる。

遺物の時期は53～58、60、62は10世紀前半～11世紀前半の範疇に収まる。59が8世紀後半～9世紀前半の範疇に収まる。61が10世紀前半の範疇に収まる。63は兵庫県相生市緑ヶ丘古窯跡群における双耳壺の編年より、9世紀末～10世紀初頭に製作されたものと考えられるが、突帯の形状や口縁端部の形状により古相の要素が認められるため、9世紀末に製作されたものと考えられる。

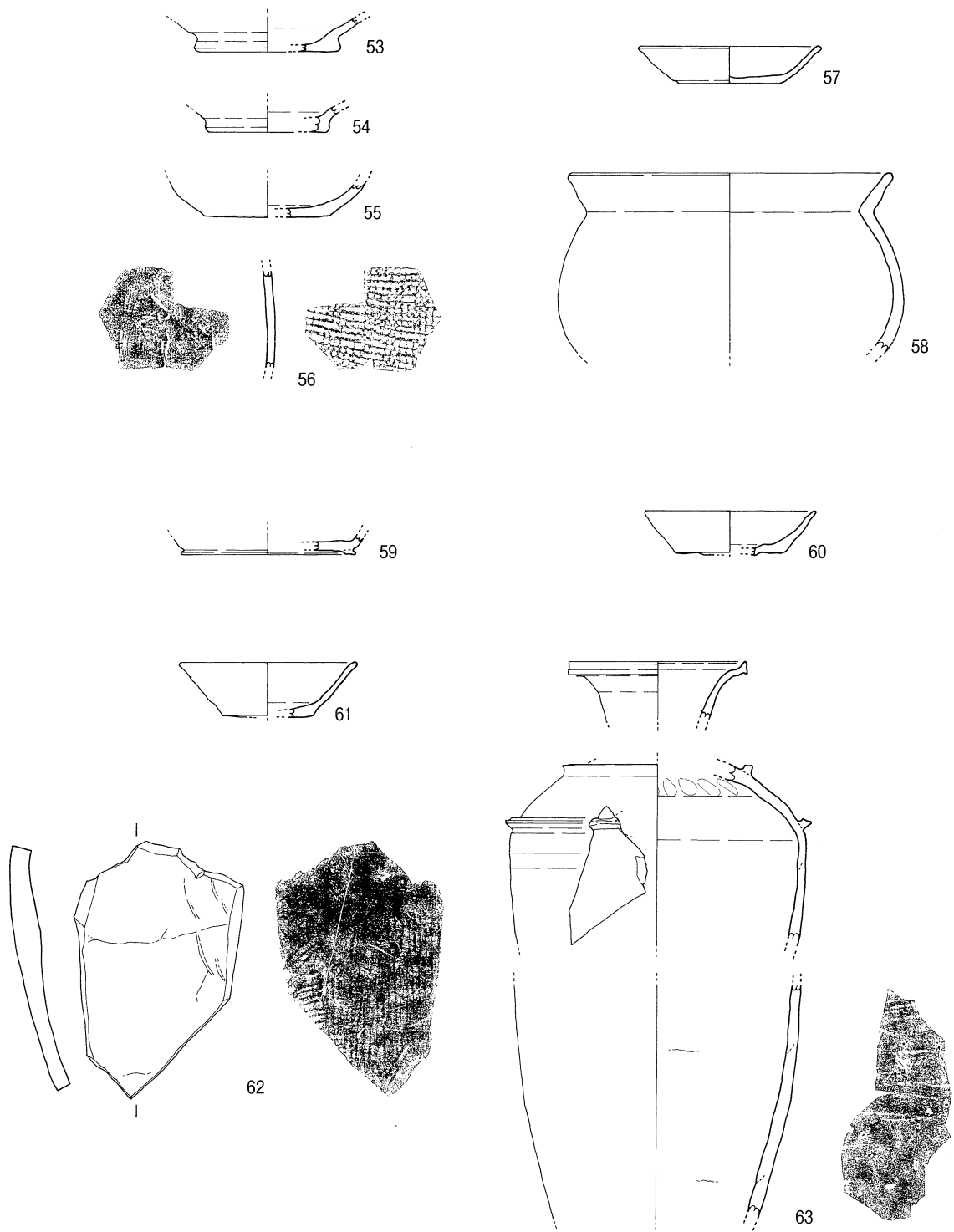
(3) A地区 第1テラス出土遺物 (第14図参照)

第1テラスからは土師器、サヌカイト等が出土した。

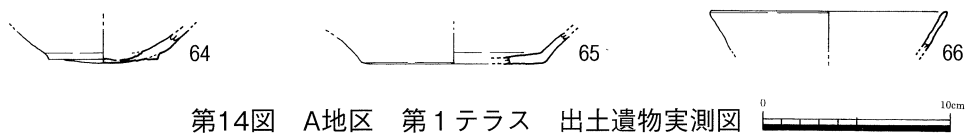
第14図は第1テラスより出土した遺物である。64～66は流土中より出土した。

64は土師器椀である。底部を回転ヘラ切りし、断面三角形の低い輪高台が付く。体部下半は緩やかな曲線を描いて外上方に立ち上がる。65は須恵器皿である。底部と体部の境に明瞭な稜を持たず、体部下半は直線的に外上方に立ち上がる。66は須恵器坏である。体部から口縁部にかけて直線的に外上方へ延びる。

遺物の時期は64が13世紀、65・66が10世紀前半と考えられる。



第13図 A地区 第4テラス 出土遺物実測図(3)



第14図 A地区 第1テラス 出土遺物実測図

5. まとめ

(1) 中寺廃寺跡A地区の検討

① はじめに

中寺廃寺跡A地区は昭和59年度・平成16年度において発掘調査を行い第2テラスにおいて仏堂跡、第3テラスにおいて塔跡を確認した。その結果A地区は国家仏教に関わる中寺廃寺跡の中心地区と想定した。その後平成19年度に第1・4・10テラス及び里道の発掘調査を行い、A地区における新たな状況が明らかとなった。そこで以前の調査成果に平成19年度調査で明らかとなった内容を補足し、改めて中寺廃寺跡A地区について検討を行う。

第10テラスにおいては焼土面をもつ土坑1基、柱穴数基を確認したものの、尾根上に所在するためか今回の調査において遺物が確認できなかったため、今後の調査に期待したい。

② 第2・3テラスの状況

A地区は中寺廃寺跡の各遺構が分布する谷の最奥部に立地し、寺院の中心的な施設である塔・仏堂が規則的に配置された寺院の中心部として位置づけられる。仏堂跡を確認した第2テラスと塔跡を確認した第3テラスはA地区から北東へ延びる主尾根の側面から南に延びる緩やかな尾根上に立地する。

第2テラスは標高約727mに位置し南面する平坦地で、山側を岩盤まで削平し谷側に盛土し造成している。平坦地と山側斜面の間においては建物柱筋に平行した溝状遺構を確認しており、建物の雨落ち溝と山側斜面から流れ込む雨水の排水溝を兼ねた溝と思われる。谷側には平坦地造成に併せて緩斜面を造成しており、建物に付随した広場と考えられる。平坦地においては桁行3間(約6.7m)×梁行2間(約4.7m)の掘立柱建物跡と桁行3間(約6.3m)×梁行2間(約4.6m)の礎石建物跡をほぼ同位置で検出した。礎石はすべて掘り方を掘削して据えている。各建物は同一の平坦地を柱穴及び礎石掘り方が掘り込み造成されている。埋没した柱穴を覆うように礎石が据えられている箇所が確認できるため、掘立柱建物から礎石建物へ建て替えられていることがわかる。建物跡の方位は掘立柱建物跡・礎石建物跡共に梁行方向でN-5°-Eであり、建物はほぼ真南を向くと考えられる。掘立柱建物跡においては柱穴の間隔が約2.1mで統一されるが、桁行中央の1間のみ約2.3mを測り約20cm広い。また梁行中央の柱の間隔は約6.5mを測り、建物桁行に対して約20cm狭い。また、礎石建物跡については礎石の間隔は桁行約2.1m、梁行約2.3mで統一される。建物が造成された平坦地直上の流土中より10世紀後半～11世紀の土師器坏と鉄製品が多量出土した。土師器坏は表面に黒色の付着物や円形剥離が見られ灯明皿として使用されたと考えられる。土師器坏は建物南西よりで多く出土した。鉄製品はX線写真観察により和釘、先端を輪状に加工したもの、かすがい状のものが確認できた。鉄製品は建物中央北よりに集中して出土した。第2テラスに所在した建物については後述する塔跡との位置関係により、塔より上位の建物が所在したと考えられる。また、遺物の出土状況より鉄製品は

仏像や須弥壇に関わる金具、灯明皿は照明器具であった可能性が考えられる。従って、第2テラスに所在した建物は仏堂であったと想定した。

第3テラスは標高約723mに位置し南面する平坦地で、山側を岩盤まで削平し谷側を基壇状に盛土し造成している。地盤が軟弱な谷側は地面を掘り窪め、互層状に土を積み固めることで地盤改良を行っている。平坦地と山側斜面の間においては建物柱筋に平行した溝状遺構を確認しており、建物の雨落ち溝と山側斜面から流れ込む雨水の排水溝を兼ねた溝と思われる。建物跡は礎石が南北3間(約5.4m)×東西3間(約5.2m)で並び、その中央に1間四方の礎石とさらに中央に一際大きな心礎石が位置することから塔跡と考えられる。礎石は地山上に直に据えたものと盛土上に掘り方を掘削し据えたものがある。塔跡の方位は南北方向でN-5°-Eであり、塔はほぼ真南を向くと考えられる。礎石の間隔は南北方向は約1.8m、東西方向は約1.7mで統一される。建物が造成された平坦地直上の流土及び盛土中より10世紀の土師器と須恵器が出土した。塔跡心礎直下の土坑内には中央に長胴甕、その周囲に赤く焼成された10世紀前半の須恵器壺5個を立て並べていた。

第2テラス仏堂跡と第3テラス塔跡は讃岐国分寺と同じ大官大寺式の伽藍配置をとる。また、塔跡心礎石直下の土坑より出土した須恵器壺は讃岐国府より約4kmの近隣に所在する十瓶山古窯跡群において特注品として焼成されたと考えられ、中寺廃寺跡造営の背景に讃岐国府や讃岐国分寺が関与した可能性が高い。従ってA地区の第2・3テラスは国家仏教と関わる中寺廃寺跡の中心施設であったと考えられる。

③ 第1・4・10テラス及び里道の状況

平成19年度調査により、中寺廃寺跡A地区第1・4・10テラス及び里道の調査を行った。その結果明らかになった状況を述べる。第1テラスにおいては溝状遺構を確認した。第1テラスは塔・仏堂の背後に立地し塔・仏堂と方位がほぼ一致すること、10世紀前半の遺物が出土していることから塔・仏堂等と同時期に何らかの施設があったと考えられるものの詳細は不明である。第10テラスにおいては焼土面をもつ土坑1穴、柱穴数穴を確認した。里道においては道が山側の切土と谷側の盛土によって造成されていることが確認できた。人里離れた山中の山道にも関わらず比較的大規模な造成がなされているため、中寺廃寺造営に伴い道が設置された可能性が考えられる。

第4テラスは中寺谷の最奥部、A地区第1～3テラスを擁する南方向へ延びる緩やかな尾根の側面の南西向きの谷部に立地する。第4テラスは標高約720mに位置し南西に面する平坦地で、山側を岩盤まで削平し谷側に盛土して造成している。平坦地と山側斜面の間においては溝状遺構SD01を確認している。SD01はSB01の柱穴列とは平行しないためSB01の雨落ち溝である確証は得られないものの、山側斜面からの雨水が建物に入らないようにするための排水溝であったと考えられる。建物跡は桁行3間(約5.5m)×梁行2間(約3.6m)の掘立柱建物跡SB01を検出した。建物は地山と盛土で造成された平坦地を柱穴が掘り込み造成されている。

盛土中には焼土・炭などを多く含むため、盛土下位に先行する遺構が存在する可能性が考えられる。建物跡の方位は梁行方向でN-31°-Eであり、建物は南東を向くと考えられる。梁行における各柱穴の間隔は約1.8～1.9mで統一されるが、桁行における各柱穴の間隔は中央の1間が約2.0～2.1mとなり、他は約1.7～1.8mで統一される。また、梁行中央の柱の間隔は約5.3mを測り、建物桁行に対して約20cm狭い。また、建物床面の一部においては赤褐色を呈する被熱面を確認した。建物が造成された平坦地直上の流土中や盛土中からは調理具・供膳具が多量に出土した。遺物の時期は主に10世紀前半～11世紀前半の範疇に収まる。

第4テラスSB01については建物中央から山側の壁際までの限られた場所で被熱面を確認したことにより、建物内で火を使用した施設であったと考えられる。また、遺物として調理具や供膳具が多量に出土したことを考慮すると、被熱面は築竈^{きずきかまど}の痕跡であり、建物は調理施設であったと想定するのが妥当と考えられる。築竈については絵図に記載された例が確認できるため、参考資料として第15図に掲載した。調理施設を持つ寺院内の建物としては「^{おおい}大炊屋」「^{くりや}厨」「かまど屋」等が考えられる。

④ A地区の意義について

以上、今年度調査成果により中寺廃寺跡の中心的地区と考えられるA地区において調理施設が存在することが確認された。A地区第4テラスSB01と隣接する第2テラス仏堂跡・第3テラス塔跡においては同時期の遺物を確認したため、中寺廃寺跡A地区には仏堂・塔といった国家仏教に関わる中心的地区に加えて、第4テラスSB01のような僧侶の生活に関わる施設が併存したことがわかる。隣接して併存したにも関わらず、前述の両者の間には、立地・造成の面において差異が認められる。それは仏堂跡・塔跡が尾根上に立地するのに対し、第4テラスSB01は谷部に立地することである。また、建物の方位は仏堂跡・塔跡がほぼ南を向くのに対し、第4テラスSB01は南東を向くことも挙げられる。これは平坦地を谷の等高線に沿わせ自然地形に従うことで比較的軽微な造成で平坦地を造成したためと考えられる。中寺廃寺跡A地区全体を見ると（第3図）、方位に沿わない未調査の平坦地が数箇所確認でき、これらも第4テラスと同じく僧侶の生活に関わる施設が所在した可能性が考えられる。

このように、国家仏教に関わる中心施設である塔（第3テラス）・仏堂（第2テラス）は厳密に方位に従うが、僧侶の生活に関わる調理施設（第4テラス）は自然地形に従うという建物造成方法の違いは、古代山岳寺院の一側面として重要な意義を持つと考えられる。

第15図: 賭都合により非公開

第15図 絵図中の榮産（桐生2007より転載）

(2) 中寺廃寺跡付近の道について

① はじめに

平成19年度に実施した里道部分のトレンチ調査の成果により、里道の一部は山側を切土し谷側を盛土し造成したことを確認した。中寺廃寺跡付近は寺院廃絶以降、峠を歩いて越える人々や炭焼きや山菜取り等に訪れる人が通るのみであったと考えられるため、道に大規模な造成を加えられたのは中寺廃寺跡が造営されていた当時のことと考えられる。

本稿では現在まで現地踏査・文献調査・聞き取り調査等で確認した中寺廃寺跡付近の道を提示し、その性格について検討したい。

② 中寺廃寺跡付近の道

・中寺廃寺跡～大川神社の道（a）

中寺廃寺跡から笹ヶ多尾にかけての尾根の頂上付近には里道が通る。また、笹ヶ多尾から大川山山頂の大川神社にかけての讃岐山脈上にも里道が通る。大川神社は天平四（731）年に当時の国司が参詣して降雨を願うと大雨が降ったと伝えられ、雨乞いや安産の神として讃岐・阿波の人々から信仰を集めている。

また、この道は天保6（1835）年2月に高松藩主松平頼恕公よりひろ たかのが鷹野に訪れた際に通行したという記録を西村家文書において確認している。その際に描かれた絵図には中寺廃寺跡から大川神社の途中に鳥居が描かれており、当時からこの道が大川神社の参道の一つとして利用されていたことがわかる。

聞き取り調査によると、昭和まで讃岐山脈付近において炭焼きが盛んであり、この里道を辿り江畑地区えばた・塩入地区しおいり・柞野地区くぎのへ炭を運搬していたとの事である。また、昭和まで大川神社に至る信仰の道として利用されていたとの事である。

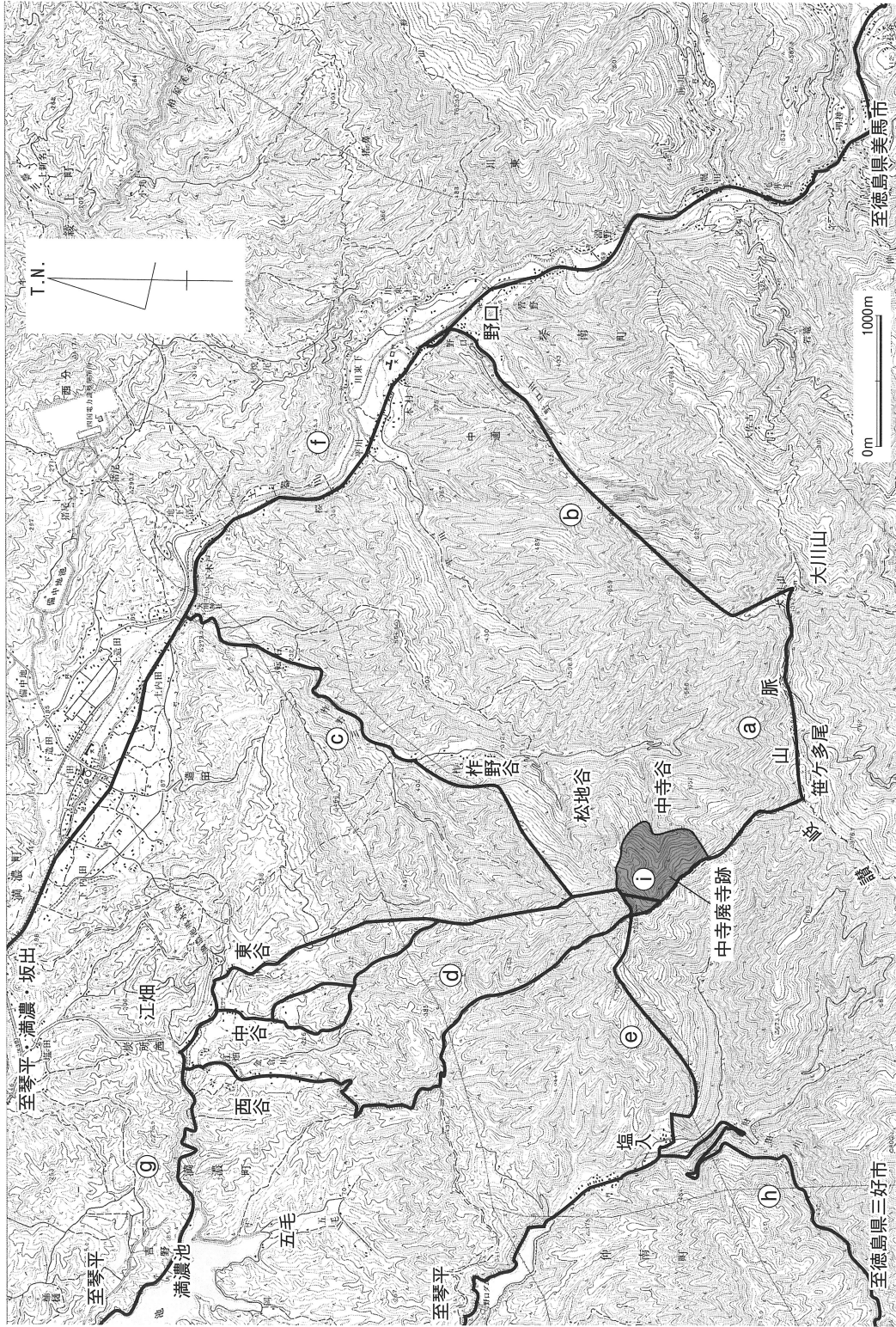
・大川神社～野口地区の道（b）

大川神社からは琴南地区方面への道が数本分岐している。この内まんのう町中通野口地区へは「大川道」と呼ばれる里道が通る。「大川道」沿いには石灯笼・鳥居・手水鉢ずいしんもん・随神門といった神社に関わる施設が所在し、道が神社の参道としての役割を果たしていることがわかる。また、道沿いには丁石や標石が設置され大正時代の銘を持つもの、天保年間の銘を持つもの、割石に文字を彫ったものを確認している。その内最も古い時代の銘文は、随神門の脇に設置された石灯笼の天保6（1835）年の銘文である。

聞き取り調査によると、昭和まで大川神社への参詣者や炭焼きの人が往来したとの事である。

・中寺廃寺跡～柞野地区の道（c）

中寺廃寺跡の北側から延びる道を尾根沿いに辿ると柞野地区へと下りることができる。



第16図 中寺廃寺跡付近の道

聞き取り調査によると、昭和まで中寺廃寺跡を經由し大川神社への参詣者や炭焼きの人が往来したとの事である。

また、この付近には「松地（＝末寺）谷」という寺院関係の地名が残る。

・中寺廃寺跡～江畑地区の道（d）

中寺廃寺跡から北西方面へ尾根を辿り西谷を經由する、もしくは中寺廃寺跡から北へ尾根を辿り東谷もしくは中谷を經由するとまんのう町吉野江畑地区へ下りることができる。聞き取り調査によると、昭和まで双方の道を通り（東谷を經由する道が緩やかであるため、主にこちらを通った）、中寺廃寺跡を經由し大川神社や徳島方面へ交通していたとの事である。

また、江畑地区には中寺廃寺の僧侶が菜園を営んだと伝承される「菜園場」という地名が残る。

・中寺廃寺跡～塩入地区の道（e）

中寺廃寺跡か西へ尾根を辿るとまんのう町塩入地区へ下りることができる。

この道は、天保時代6（1835）年2月に高松藩主松平頼恕公が鷹野よりひろ たかのに訪れた際に通行したという記録を西村家文書において確認している。

また、塩入集落から中寺廃寺跡へと登る登山口には、塩入庵という明和年間（1764～69）に賢龍法師により結ばれたとされる庵がある。境内にある賢龍法師の墓には「明和九年壬辰五月十日死」と記されている。塩入庵は中寺廃寺が起源と伝承される寺院のうちの一つである浄楽寺（丸亀市垂水町）が管理している。

聞き取り調査によると、昭和まで大川神社への参詣者や炭焼きの人が往来したとの事である。

・琴南地区～徳島県美馬市の道（f）

まんのう町琴南地区と徳島県美馬市の間には峠を介した車道が通る。この道は金比羅阿波街道の一つとして賑わいを見せた道である。この道は聞き取り調査によると、昭和までこの道を通り借耕牛の往来があるなど阿波と讃岐の交流の道であったとの事である。

・江畑地区～満濃池の道（g）

江畑地区から満濃池にかけては車道が通る。この道は『満濃町史』によると藩政時代以前から阿波の国から大川神社に詣で、中寺廃寺を経て江端・五毛を通り、金比羅宮に参詣するコースが盛んに利用されたとされる。

・仲南地区～徳島県三好市の道（h）

まんのう町仲南地区と徳島県三好市の間には峠を介した車道が通る。この道は塩入街道と呼

ばれ賑わいを見せた道である。この道は聞き取り調査によると、昭和までこの道を通り借耕牛の往来があるなど阿波と讃岐の交流の道であったとの事である。この道は聞き取り調査によると、昭和までこの道を通り借耕牛の往来があるなど阿波と讃岐の交流の道であったとの事である。

・ A地区内の道（i）

A地区内には平野部からの道が交差する場所があり多くの道が通る。

まず、江畑地区西谷と塩入地区からの道が第10テラス付近で合流し、そこから尾根上の道が北東と南東へ延びる。次に、杵野地区および江畑地区東谷と江畑地区中谷からの道がA地区第1テラス北西を通り、今年度調査を行った里道部分を経由し讃岐山脈に通じる尾根上の道と連結している。この道の内、第2テラス付近から讃岐山脈に通じる尾根状の道の間は同じような現況を呈しており、今年度里道の調査を行った箇所切土・盛土による造成が続く可能性が高いと考えられる。

③各道の性格の検討

以上、中寺廃寺跡付近の道について提示した。次にこれらの道の性格を検討したい。

まず、現在も車道が通り（f・g・h）がある。この内（f・h）は借耕牛の往来が盛んであったと伝えられ、以前より阿波と讃岐を峠を介して結ぶ主要道として使われていたと考えられる。

次に、石造物及び文献資料により天保年間まで遡る道（a・b・e）や聞き取り調査により確認した昭和まで大川神社に至る参詣の道や炭焼きの道として使用されたと伝えられる使われた道（a・b・c・d・e）がある。この中で中寺廃寺跡を経由する道（a・c・d・b）は麓の集落に中寺廃寺跡に関係する可能性のある地名や庵が所在するため、中寺廃寺跡と関係がある可能性がある。

④今後の課題

中寺廃寺跡付近の道についての調査・研究は、中寺廃寺の立地や各地域との関係を考える上で非常に重要な意義を持つと考えられる。今回の検討では中寺廃寺跡付近の道について概観したに留まったが、各道の詳細や中寺廃寺跡内の各地区を連結する道を調査・検討することでより目的が達成できると考えている。次年度以降の検討課題としたい。

参考文献

- 上原真人2002 「古代の平地寺院と山林寺院」『佛教藝術265 特集山岳寺院の考古学的調査西日本編』佛教藝術学会
- 上原真人2005 「火を囲む暮らし－炉と竈」2005『列島の古代史 ひと・もの・こと2 暮らしと生業』岩波書店
- 桐生直彦2007 「忘れられたカマド屋」『東京考古 25』東京考古談話会
- 片桐孝浩1992 「古代から中世にかけての土器様相」『中小河川大東川改修工事（津ノ郷橋～弘光橋間）に伴う埋蔵文化財発掘調査報告』香川県教育委員会
- 後藤健一他1997 『湖西市文化財調査報告 第37集 大知波峠廃寺跡』湖西市教育委員会
- 進藤政量1799 「讃岐廻遊記」（1943『香川叢書』第3巻所収）
- 森内秀造1995 『兵庫県文化財調査報告 第139冊 山陽自動車道関係埋蔵文化財調査報告相生市・緑ヶ丘窯址群2』兵庫県教育委員会
- 1975 『満濃町史』満濃町
- 1982 『仲南町誌』仲南町
- 1986 『琴南町誌』琴南町
- 1995 『概説 中世の土器・陶磁器』中世土器研究会
- 1997 『湖西市文化財調査報告第37集 大知波峠廃寺跡確認調査報告書』湖西市教育委員会
- 2005 『琴南町内遺跡発掘調査報告書第1集 中寺廃寺跡 平成16年度』琴南町教育委員会
- 2006 『琴南町内遺跡発掘調査報告書第2集 中寺廃寺跡 平成17年度』琴南町教育委員会
- 2007 『まんのう町内遺跡発掘調査報告書第2集 中寺廃寺跡 平成18年度』まんのう町教育委員会
- 2007 『まんのう町内遺跡発掘調査報告書第3集 中寺廃寺跡』まんのう町教育委員会

第1表 中寺廃寺跡出土遺物観察表(1) 土器

図版番号	種別・器種	出土地区	出土地点	法量 (cm)		焼成	胎土	色調・内面	色調・外面	備考
				口径	底径					
1	土師器・環	A地区	第4テラス 地山直上	16.1		良	0.1cm以下の黒色粒を多量に含む	橙色7.5YR6/6		
2	土師器・環	A地区	第4テラス 地山直上	11.7		良	0.05cm以下の砂粒を含む 0.1cm以下の黒色粒を少量含む	浅黄色10YR8/4		
3	土師器・環	A地区	第4テラス 地山直上	12.4		やや良	0.05cm以下の砂粒を含む	灰白色2.5Y8/2		
4	土師器・環	A地区	第4テラス 地山直上		7.0	やや良	0.1cm以下の石英・黒色粒を少量含む	浅黄色10YR8/4		円盤状高台、底部回転ヘラ切り
5	土師器・環	A地区	第4テラス 地山直上		7.2	やや良	0.2cm以下の砂粒を少量含む	にぶい黄褐色 10YR7/4		円盤状高台、底部回転ヘラ切り
6	土師器・環	A地区	第4テラス 地山直上		8.0	良	0.2cm以下の黒色粒を多量に含む	にぶい黄褐色 10YR7/4		円盤状高台、底部回転ヘラ切り
7	土師器・環	A地区	第4テラス 地山直上		7.0	やや良	0.1cm以下の黒色粒を多量に含む	淡黄色2.5Y8/4		底部回転ヘラ切り
8	土師器・環	A地区	第4テラス 地山直上		7.7	良	0.1cm以下の黒色粒・砂粒を含む	浅黄色10YR8/3		底部回転ヘラ切り
9	土師器・環	A地区	第4テラス 地山直上		8.2	良	0.1cm以下の黒色粒・砂粒を少量含む	浅黄色2.5Y8/4		底部回転ヘラ切り
10	黒色土器・椀	A地区	第4テラス 地山直上	15.2		良	0.2cm以下の砂粒を少量含む	黒色N2/		両黒焼成
11	土師質土器・土鍋	A地区	第4テラス 地山直上	34.4		悪	0.1cm以下の砂粒を多量に含む	淡黄色2.5Y8/4		外面格子タタキ目、内面当て具痕
12	須恵器・甕	A地区	第4テラス 地山直上			堅緻	0.1cm以下の砂粒を多量に含む	灰色N5/		
13	土師器・環	A地区	第4テラス 27層	17.8		良	0.1cm以下の黒色粒を多量に含む	橙色7.5YR6/6		
14	土師器・環	A地区	第4テラス 27層	12.7		良	0.2cm以下の砂粒を少量含む	浅黄褐色10YR8/4		
15	土師器・環	A地区	第4テラス 27層	12.6		良	0.3cm以下の長石・石英・黒色粒を含む	浅黄褐色10YR8/4		
16	土師器・環	A地区	第4テラス 27層	12.6		良	0.3cm以下の長石・石英・黒色粒を多量に含む	浅黄褐色10YR8/4		
17	土師器・環	A地区	第4テラス 27層	11.5		やや良	0.2cm以下の黒色粒を多量に含む	淡黄色10YR8/4		底部回転ヘラ切り
18	土師器・環	A地区	第4テラス 27層		6.2	やや良	0.2cm以下の砂粒を含む	淡黄色2.5Y8/3		円盤状高台、底部回転ヘラ切り
19	土師器・環	A地区	第4テラス 27層		6.0	やや良	0.2cm以下の砂粒を含む	橙色7.5YR7/6		円盤状高台、底部回転ヘラ切り
20	土師器・環	A地区	第4テラス 27層		6.0	良	0.1cm以下の黒色粒を含む	橙色5YR6/6		底部回転ヘラ切り
21	土師器・環	A地区	第4テラス 27層		6.6	良	0.05cm以下の砂粒を多量に含む 0.1cm以下の黒色粒を少量含む	にぶい黄褐色 10YR7/4		底部回転ヘラ切り
22	土師器・環	A地区	第4テラス 27層		6.6	良	0.05cm以下の砂粒を多量に含む 0.1cm以下の黒色粒を含む	浅黄褐色10YR8/4		底部回転ヘラ切り
23	土師器・環	A地区	第4テラス 27層		8.4	良	0.2cm以下の砂粒を少量含む	灰黄色2.5Y7/2		底部回転ヘラ切り
24	土師質土器・土鍋	A地区	第4テラス 27層	35.8		悪	0.1cm以下の砂粒を非常に多量に含む	淡黄色2.5Y8/3		
25	須恵器・壺	A地区	第4テラス 27層			堅緻	0.05cm以下の砂粒を含む	褐灰色10YR5/1		
26	須恵器・壺	A地区	第4テラス 27層			堅緻	0.05cm以下の砂粒を含む	黒褐色10YR3/1		
27	須恵器・壺	A地区	第4テラス 27層		9.9	堅緻	0.1cm以下の黒色粒を多量に含む	灰色10Y6/1		底部回転系切り、京都府篠原産 須恵器
28	土師器・環	A地区	第4テラス 39層	11.6	5.9	3.1	良	淡黄色2.5Y8/3		
29	土師器・環	A地区	第4テラス 21層	11.5	7.5		やや良	にぶい黄褐色 10YR7/4		底部回転ヘラ切り

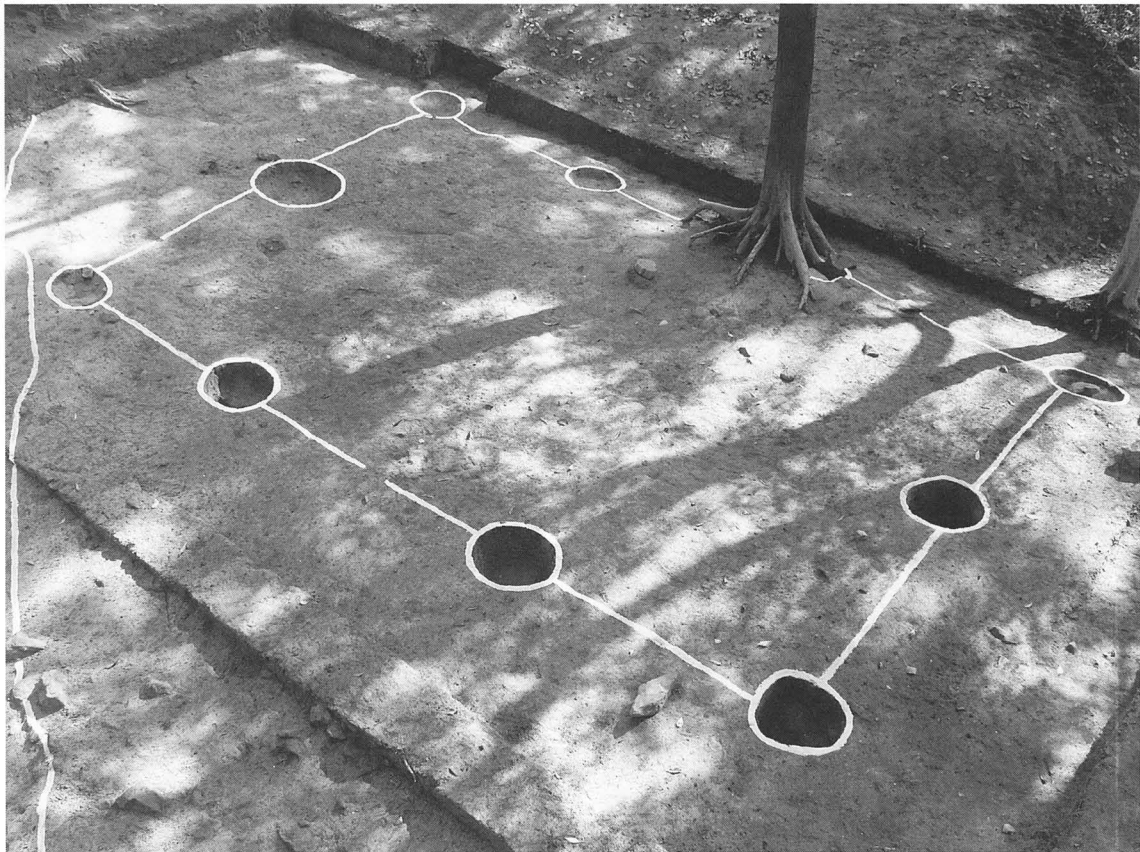
図版 番号	種別・器種	出土 地区	出土地点	法量 (cm)		焼成	胎土	色調・内面	色調・外面	備考
				口径	器高					
30	土師器・环	A地区	第4テラス 23層	13.0		良	0.1cm以下の黒色粒を多量に含む 0.3cm以下の長石・石英を少量含む	淡黄色2.5Y8/4	淡黄色2.5Y8/4	
31	土師器・环	A地区	第4テラス 35層	12.0		やや良	0.1cm以下の砂粒を含む 0.2cm以下の石英を少量含む	浅黄橙色10YR8/4	浅黄橙色10YR8/4	
32	土師器・环	A地区	第4テラス 35層	11.0		良	0.05cm以下の砂粒を含む	浅黄色2.5Y7/3	浅黄色2.5Y7/3	
33	土師器・环	A地区	第4テラス 35層	10.7		良	0.05cm以下の黒色粒・砂粒を含む	灰黄色2.5Y6/2	灰黄色2.5Y7/2	
34	土師器・环	A地区	第4テラス 35層	15.6		良	0.2cm以下の長石・石英・黒色粒を少量含む	浅黄色2.5Y7/4	浅黄橙色10YR8/4	椀となる可能性あり
35	土師器・环	A地区	第4テラス 35層	15.0		良	0.2cm以下の長石・石英・黒色粒を少量含む	浅黄色2.5Y7/4	浅黄橙色10YR8/4	34と同一固体の可能性あり
36	土師器・环	A地区	第4テラス 35層		7.6	良	0.05cm以下の砂粒を少量含む	灰白色2.5Y8/2	浅黄褐色10YR8/4	円盤状高台、底部回転へラ切り
37	土師器・环	A地区	第4テラス 35層		7.6	良	0.1cm以下の砂粒を多量に含む 0.2cm以下の石英を少量含む	浅黄褐色10YR8/4	にぶい黄褐色 10YR7/4	底部回転へラ切り
38	土師器・环	A地区	第4テラス 35層		7.0	良	0.2cm以下の黒色粒を多量に含む 0.3cm以下の長石・石英を少量含む	浅黄褐色10YR8/4	浅黄褐色10YR8/4	底部回転へラ切り
39	土師器・环	A地区	第4テラス 35層		7.4	良	0.05cm以下の砂粒を含む	明赤褐色5YR5/8	明赤褐色5YR5/8	底部回転へラ切り
40	土師器・环	A地区	第4テラス 35層	12.5	7.8	良	0.1cm以下の砂粒を含む	浅黄色2.5Y7/3	浅黄色2.5Y8/3	底部回転へラ切り
41	土師器・环	A地区	第4テラス 35層	10.8	6.0	良	0.2cm以下の長石・石英・黒色粒を含む	明黄褐色10YR7/6	明黄褐色10YR7/6	底部回転へラ切り
42	土師器・环	A地区	第4テラス 35層	11.6	5.4	良	0.1cm以下の砂粒を含む	浅黄色2.5Y7/3	浅黄色2.5Y7/3	底部回転へラ切り
43	土師器・环	A地区	第4テラス 35層	12.2	6.8	良	0.2cm以下の長石・石英・黒色粒を少量含む	浅黄褐色10YR8/4	淡黄色2.5Y8/3	底部回転へラ切り
44	土師器・环	A地区	第4テラス 35層	10.4	7.4	良	0.1cm以下の黒色粒を多量に含む	浅黄褐色10YR8/4	浅黄褐色10YR8/4	底部回転へラ切り
45	土師質土器・長胴壺	A地区	第4テラス 35層	37.8		悪	0.4cm以下の砂粒を多量に含む	にぶい褐色 7.5YR5/4	にぶい褐色 7.5YR6/4	
46	土師質土器・長胴壺	A地区	第4テラス 35層	31.5		悪	0.3cm以下の砂粒を多量に含む	明褐色7.5YR5/6	明褐色7.5YR5/8	口縁部内面横ハケ
47	土師質土器・土釜	A地区	第4テラス 35層	27.5		やや悪	0.05cm以下の砂粒を多量に含む	にぶい褐色 7.5YR7/4	灰黄褐色10YR4/2	体部外面縦ハケ
48	土師器・碗	A地区	第4テラス 35層	16.8	7.4	良	0.1cm以下の黒色粒を多量に含む 0.2cm以下の長石・石英を含む	浅黄色2.5Y7/3	浅黄色2.5Y7/3	底部回転へラ切り、底部焼成前 穿孔、体部下半内面と口縁部の 一部が受熱し黒色化
49	黒色土器・碗	A地区	第4テラス 35層	15.7	7.8	良	0.05cm以下の砂粒を含む	黒色5Y2/1	黒色5Y2/1	輪高台、同黒焼成、前面に幅 2mmのへら磨き
50	須恵器・壺	A地区	第4テラス 35層			堅微	0.05cm以下の砂粒を含む	暗灰色N3/	灰色N4/	
51	須恵器・壺	A地区	第4テラス 35層		6.9	堅微	0.05cm以下の砂粒を含む	灰色N4/	オリーブ灰色 2.5GY5/1	
53	土師器・环	A地区	第4テラス 5層		9.4	良	0.2cm以下の黒色粒・砂粒を少量含む	浅黄色2.5Y7/4	浅黄褐色10YR8/4	円盤状高台
54	土師器・环	A地区	第4テラス 5層		8.0	良	0.2cm以下の砂粒を少量含む	にぶい褐色 7.5YR6/4	にぶい褐色 7.5YR7/4	円盤状高台
55	土師器・环	A地区	第4テラス 5層		6.2	良	0.1cm以下の黒色粒・砂粒を多量に含む	にぶい褐色 7.5YR6/4	にぶい褐色 7.5YR6/4	
56	須恵器・甕	A地区	第4テラス 5層			堅微	0.05cm以下の砂粒を含む	黄灰色2.5Y5/1	黒褐色2.5Y5/1	外面格子タタキ目、内面当て具 痕
57	土師器・环	A地区	第4テラス 20層	11.4		やや良	0.2cm以下の黒色粒を少量含む	橙色2.5YR7/6	淡赤褐色2.5YR7/4	
58	土師質土器・甕	A地区	第4テラス 20層	25.0		悪	0.3cm以下の長石・石英を多量に含む	黒褐色7.5YR3/2	明赤褐色2.5YR5/6	
59	須恵器・环	A地区	第4テラス 排土中		11.2	堅微	0.05cm以下の砂粒を含む	黄灰色2.5Y6/1	灰白色2.5Y7/1	輪高台

図版 番号	種別・器種	出土 地区	出土地点	法量 (cm)		残存率	焼成	胎 土	色調・内面	色調・外面	備 考
				口径	底径						
60	土師器・坏	A地区	第4テラス 排土中	10.9	7.0	3/8	良	0.1cm以下の黒色粒を多量に含む	灰黄色2.5Y7/2	灰黄色2.5Y7/2	
61	土師器・坏	A地区	第4テラス SP10 2層	11.4	6.0	6/8	良	0.05cm以下の砂粒を多量に含む	淡黄色2.5Y8/3	浅黄橙色7.5YR8/4	円盤状高台
62	須惠器・甕 (転用碗)	A地区	第4テラス SP10 2層				堅緻	0.05cm以下の砂粒を含む	灰色N5/	灰色N4/	外面格子タタキ目、内面摩滅した当て具痕
63	須惠器・多口瓶	A地区	第4テラス 5・ 25・27・35層	11.4			堅緻	0.05cm以下の長石、石英、を少量含む 0.1cm以下の黒色粒を少量含む	灰白色5Y7/1	灰色5Y6/1	西播磨産須惠器
64	土師器・椀	A地区	第1テラス 第1 トレンチ 流土中		5.9		やや良	0.05cm以下の黒色粒を含む	灰白色2.5Y8/2	浅黄色2.5Y7/3	輪高台、回転ヘラ切り
65	須惠器・皿	A地区	第1テラス 第3 トレンチ 流土中		9.9		堅緻	0.05cm以下の黒色粒を含む	灰色7.5Y6/1	灰色7.5Y6/1	
66	須惠器・坏	A地区	第1テラス 第1 トレンチ 流土中	12.6			堅緻	0.05cm以下の黒色粒を含む	灰色7.5Y4/1	灰色7.5Y4/1	

第2表 中寺院寺跡出土遺物観察表 (2) 石製品

図版 番号	種別・器種	出土 地区	出土地点	法量 (cm)		残存率	焼成	胎 土	色調・内面	色調・外面	備 考
				長さ	幅						
52	砥石	A地区	第4テラス 35層	7.1	3.3	2.1	流紋岩	表面・裏面摩滅、側面は一面のみ調整	浅黄色2.5Y8/4	灰白色2.5Y8/2	

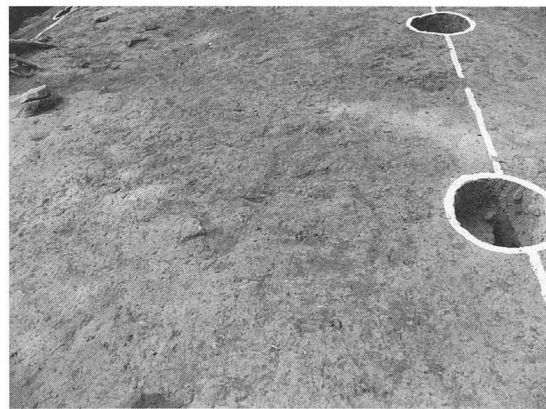
※色調は、農林水産省農林水産技術会議事務局監修・財団法人日本色彩研究所色票監修『新版標準土色帳1994年度版』を参照した。
※残存率は原則として完形品に對する実物の割合を8分割で記載し、それ以外についてはそれぞれ個別に記載した。



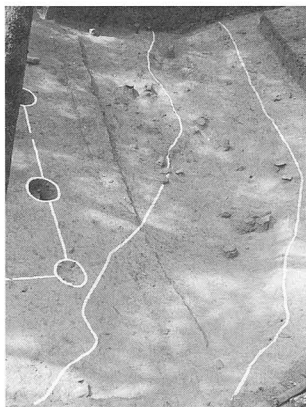
A) SB01 完掘状況 (北西より)



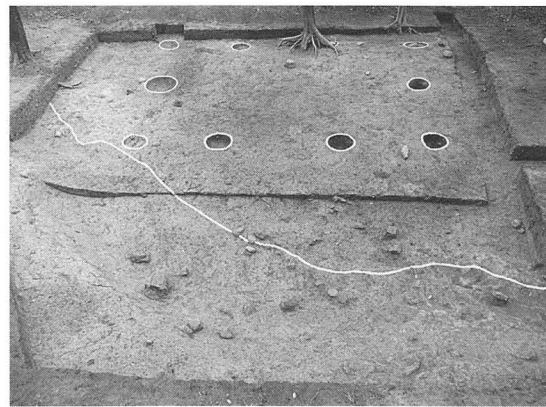
B) SB01 完掘状況 (北東より)



C) SB01 床面被熱面 (東より)

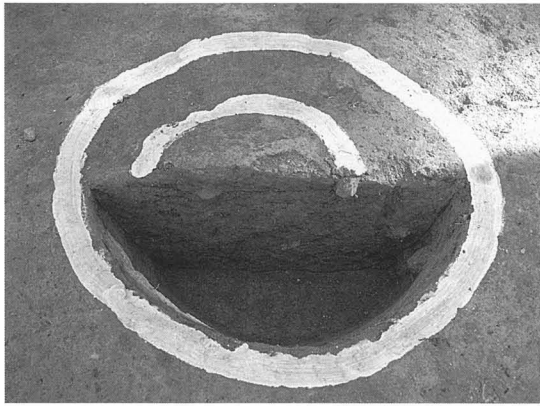


D) SD01 完掘状況 (東より)

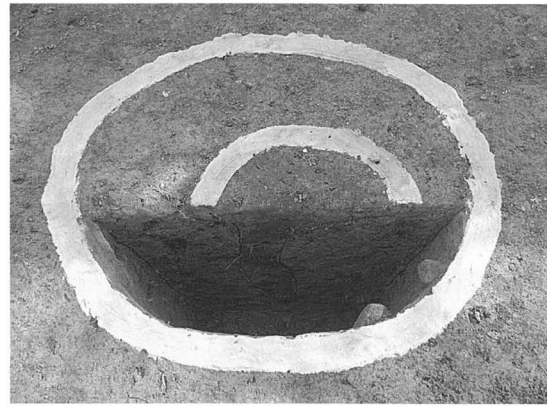


E) 全景 完掘状況 (北より)

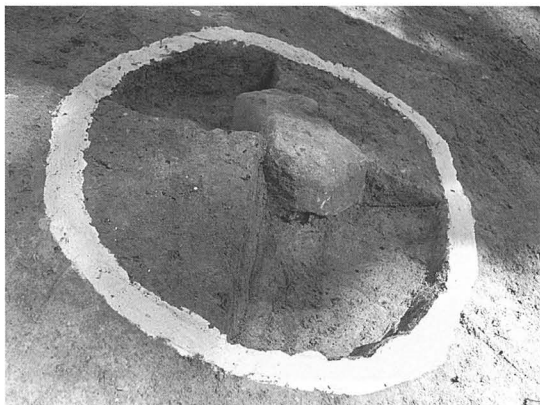
図版3



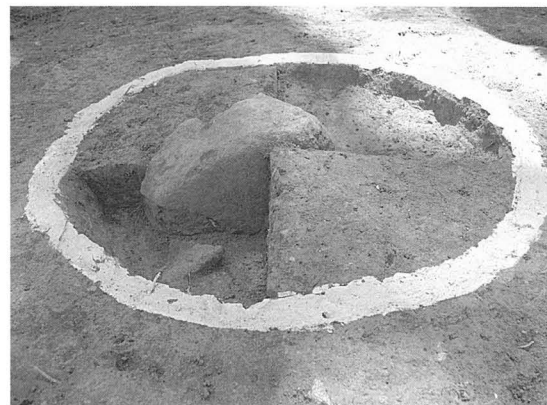
A) SP02 断面 (北より)



B) SP03 断面 (北より)



C) SP09 断面 (西より)



D) SP09 断面 (北より)



E) 遺物38 出土状況 (南より)



F) 遺物49 出土状況 (南より)



G) 遺物34・44 出土状況 (南より)



H) SD01 断面 (西より)



A) トレンチA-A' (東より)



B) トレンチA'-A''(東より)



C) トレンチC-C' (東より)



D) トレンチC-C' (西より)



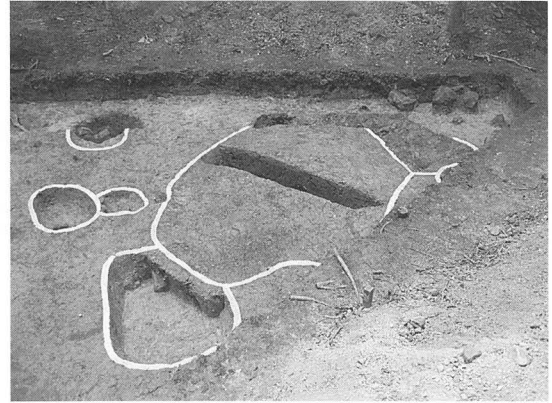
E) トレンチC-C' 溝状遺構 (西より)



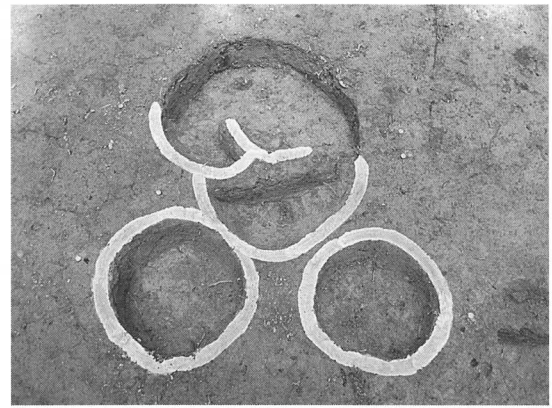
F) トレンチC-C' 溝状遺構 (北東より)



A) 全景 完掘状況 (北より)



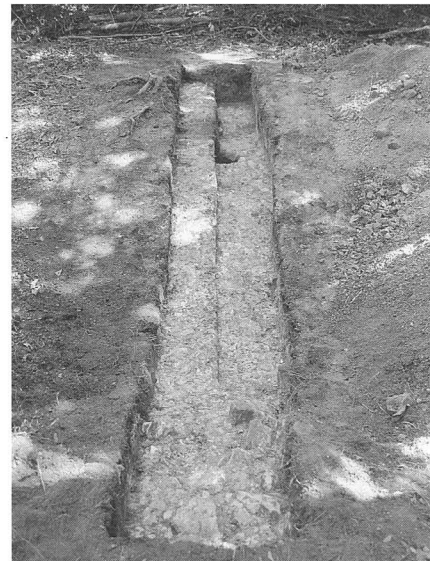
B) SK01 完掘状況 (東より)



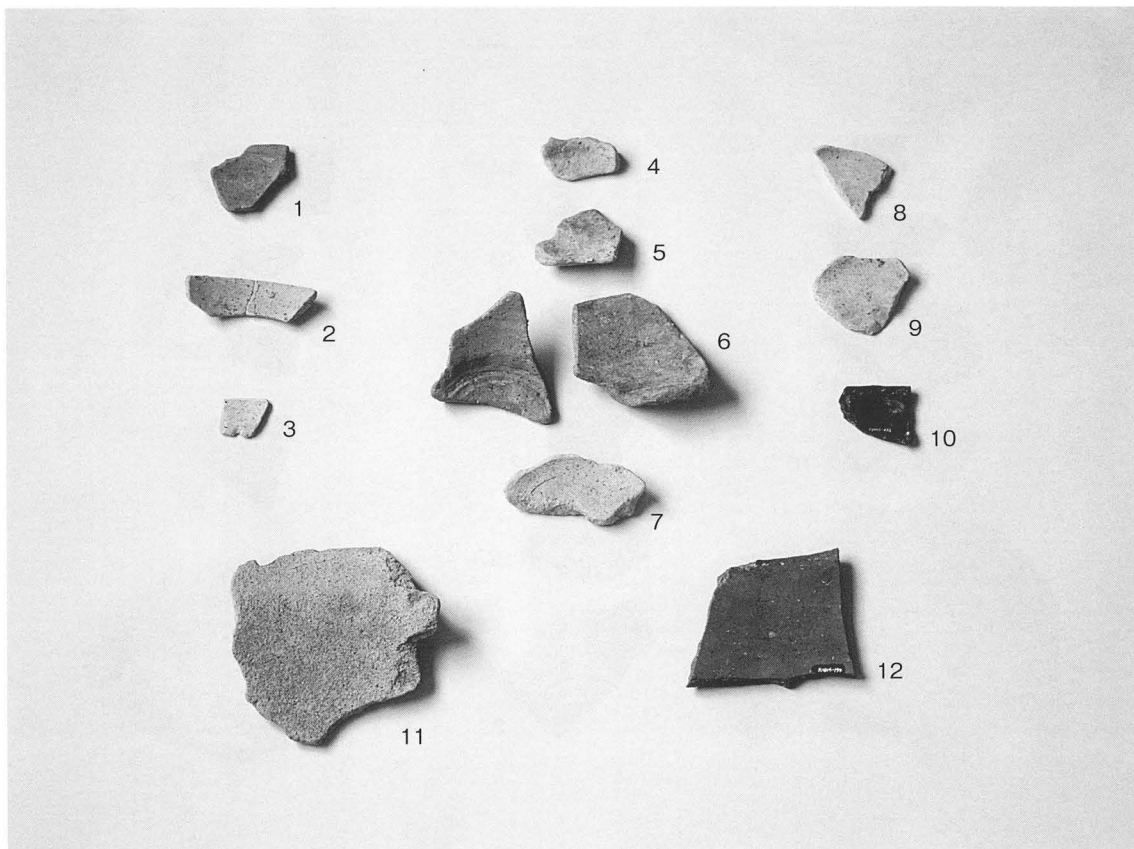
C) 柱穴群 完掘状況 (西より)



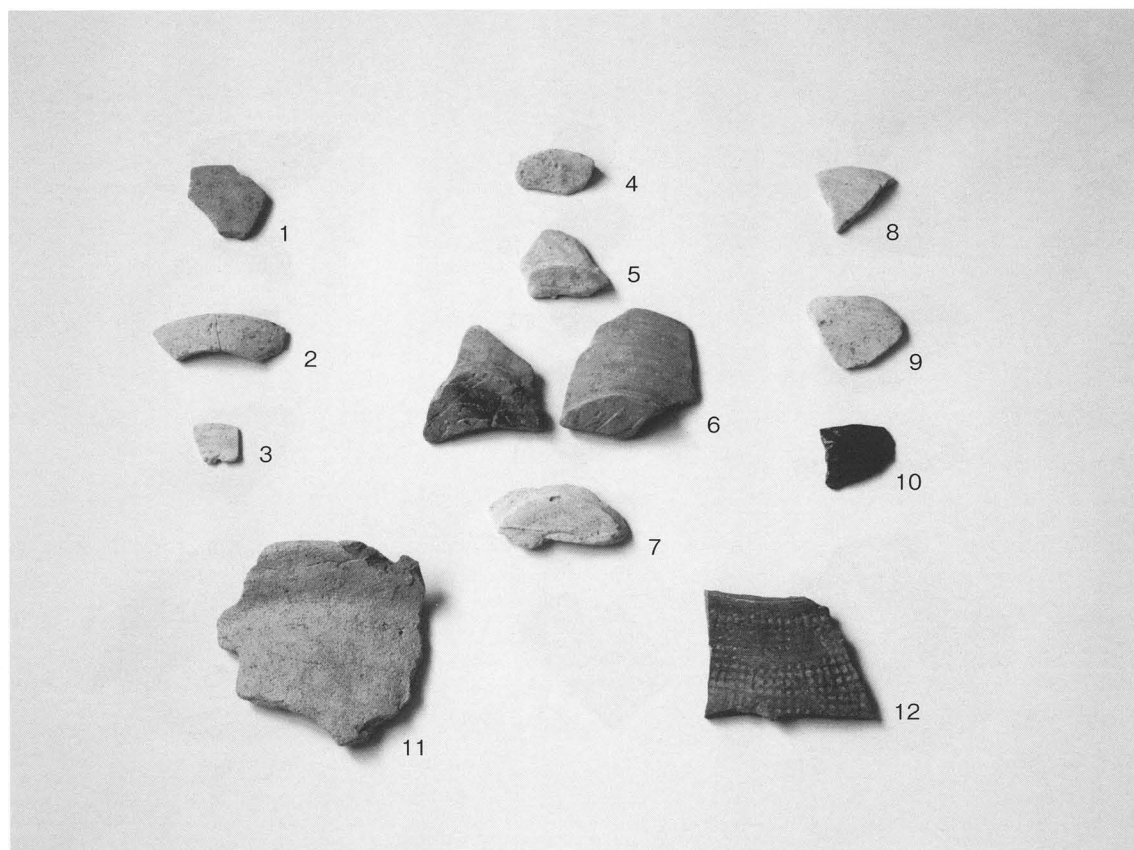
D) トレンチ全景 (北西より)



E) トレンチ全景 (南西より)

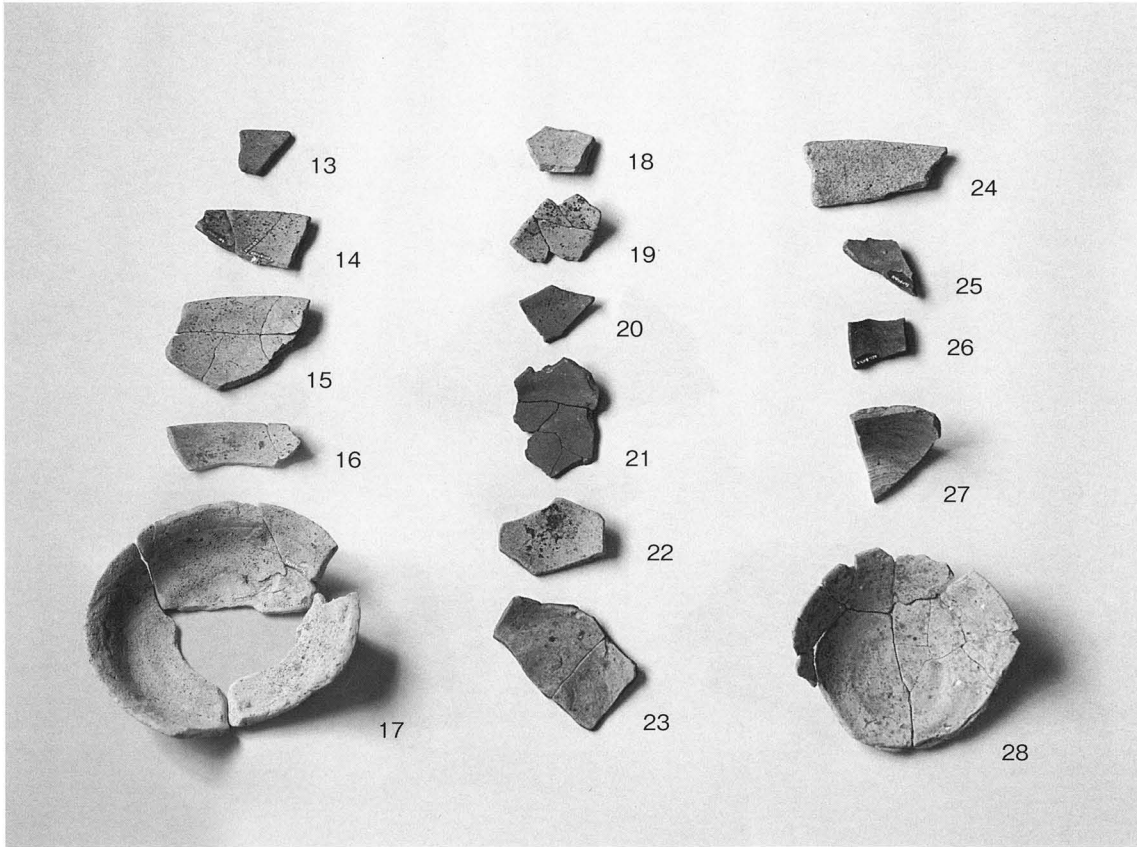


A) A地区 第4テラス 出土遺物1~12 (内面)

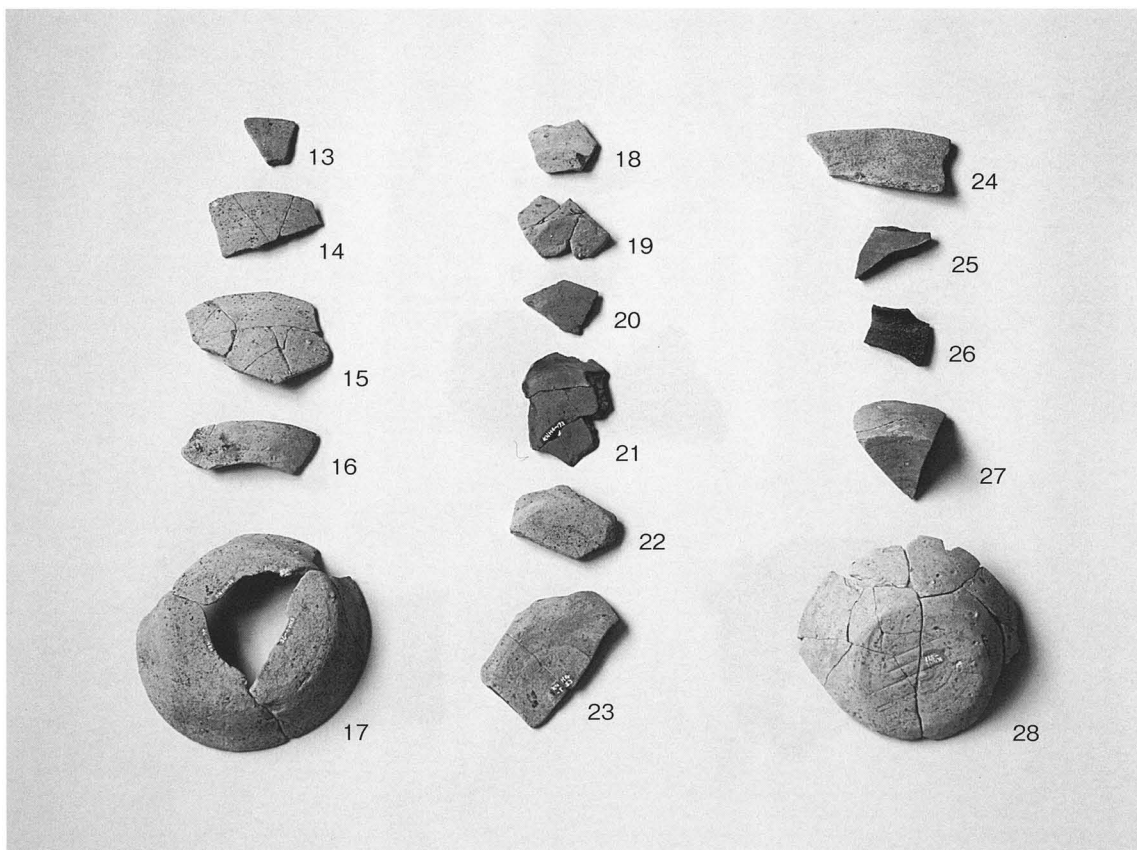


B) A地区 第4テラス 出土遺物1~12 (外面)

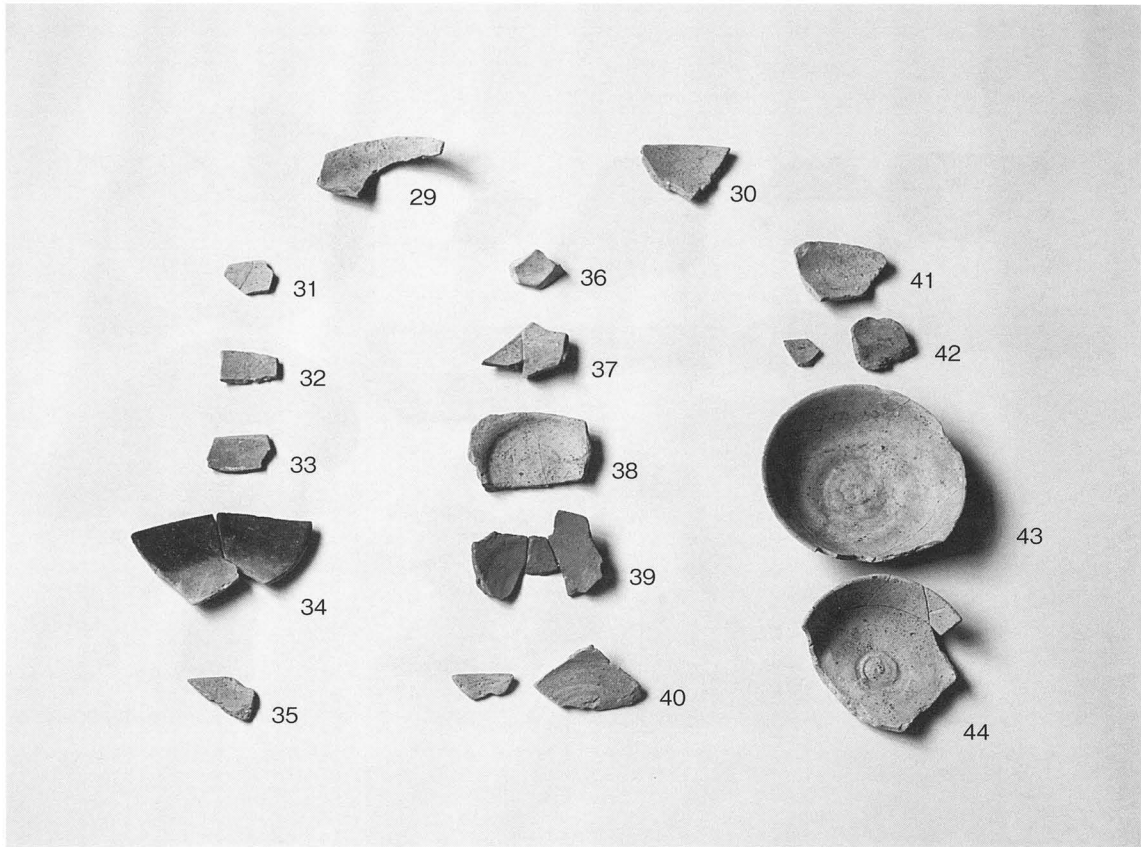
図版7



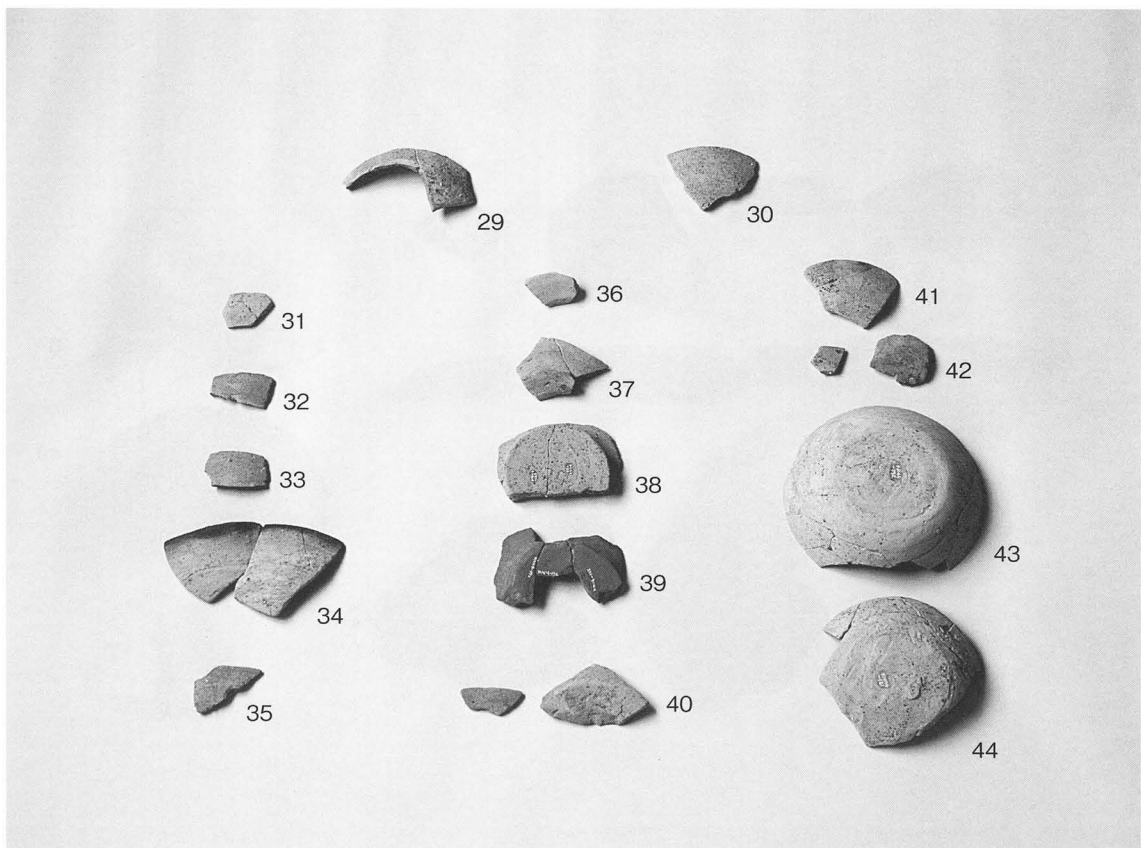
A) A地区 第4テラス 出土遺物13~28 (内面)



B) A地区 第4テラス 出土遺物13~28 (外面)

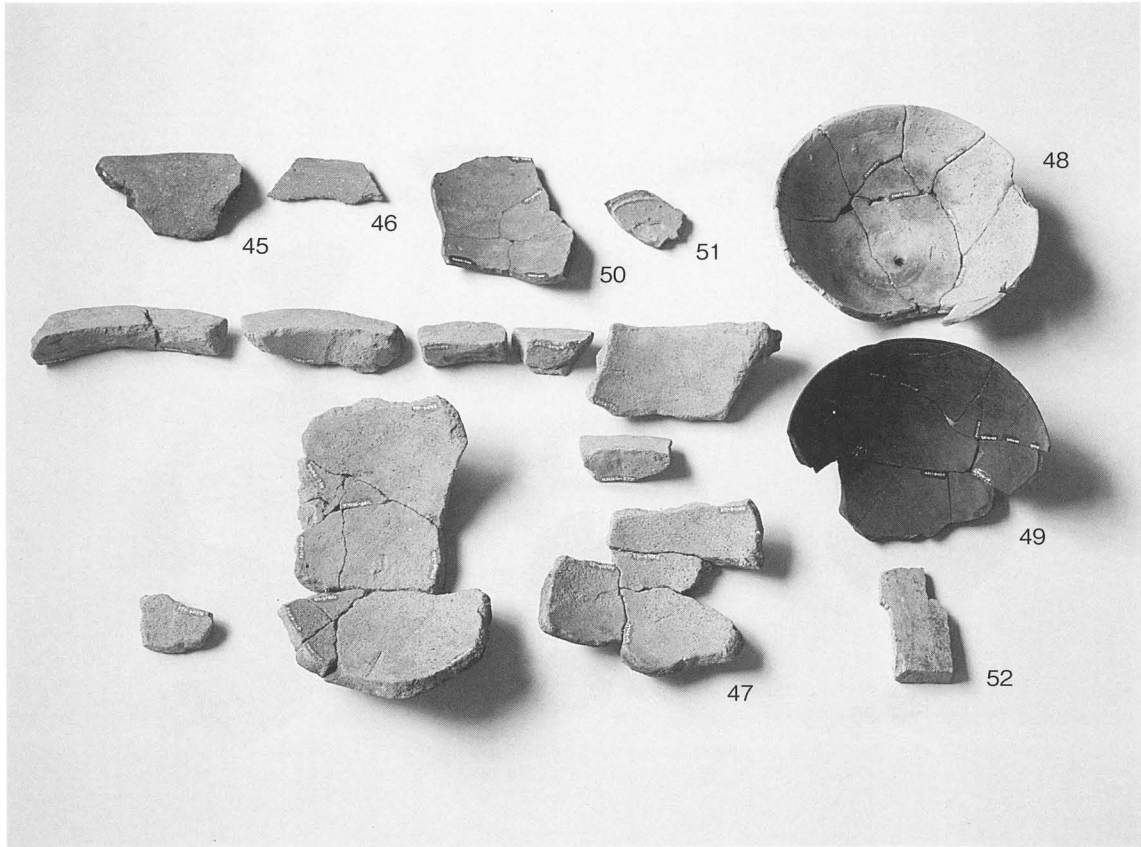


A) A地区 第4テラス 出土遺物29~44 (内面)

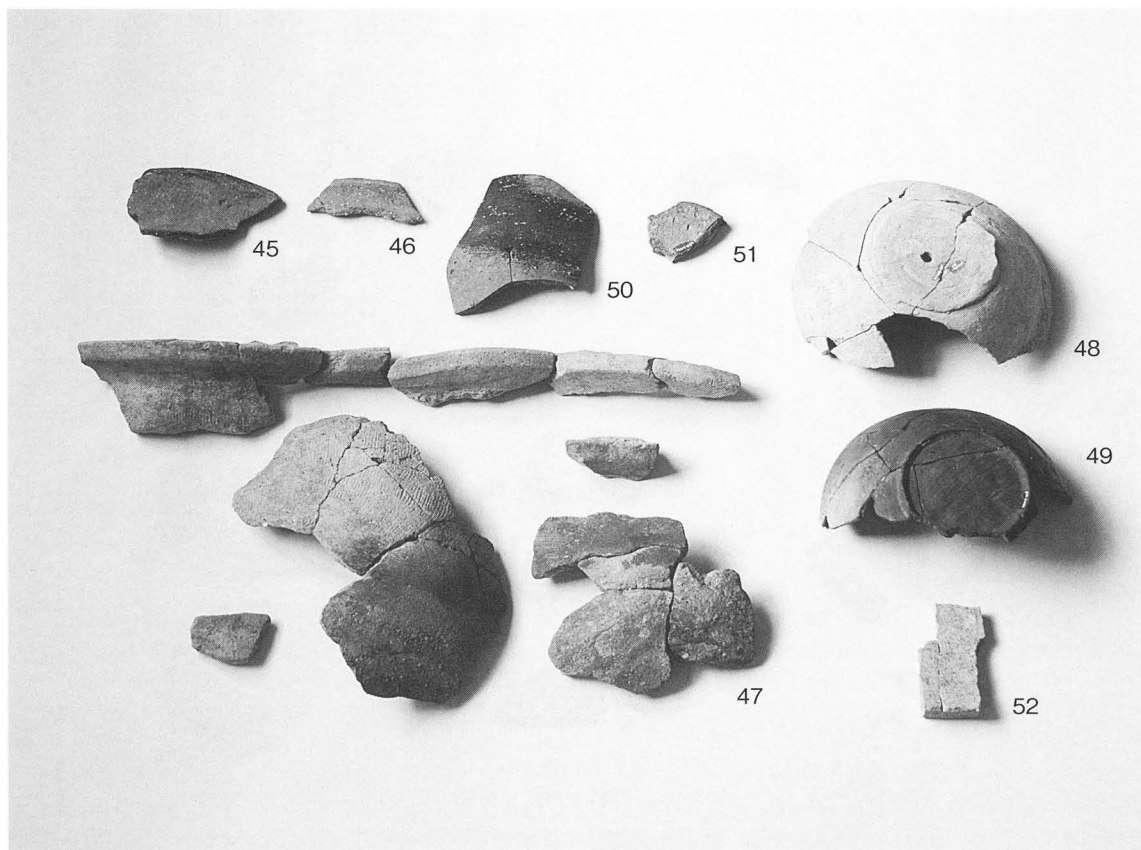


B) A地区 第4テラス 出土遺物29~44 (外面)

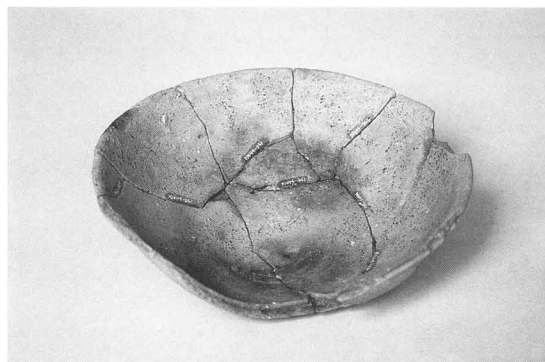
図版9



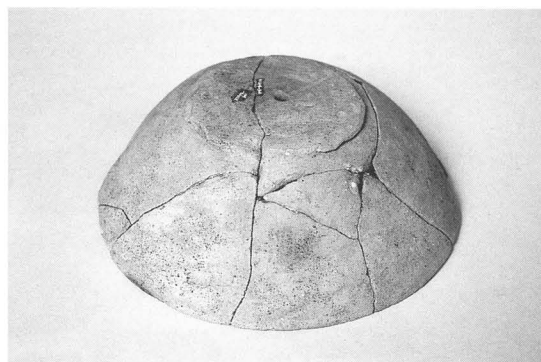
A) A地区 第4テラス 出土遺物45~52 (内面)



B) A地区 第4テラス 出土遺物45~52 (外面)



A) 土師器碗48 (内面)



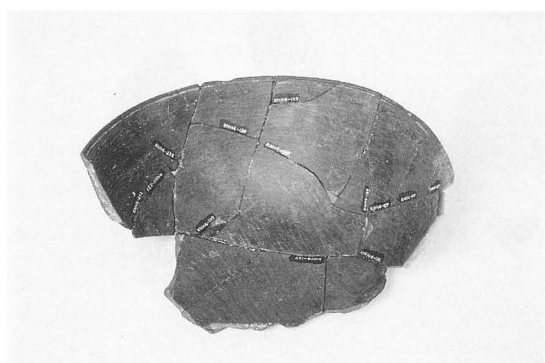
B) 土師器碗48 (外面)



C) 土師器碗48底部 (内面)



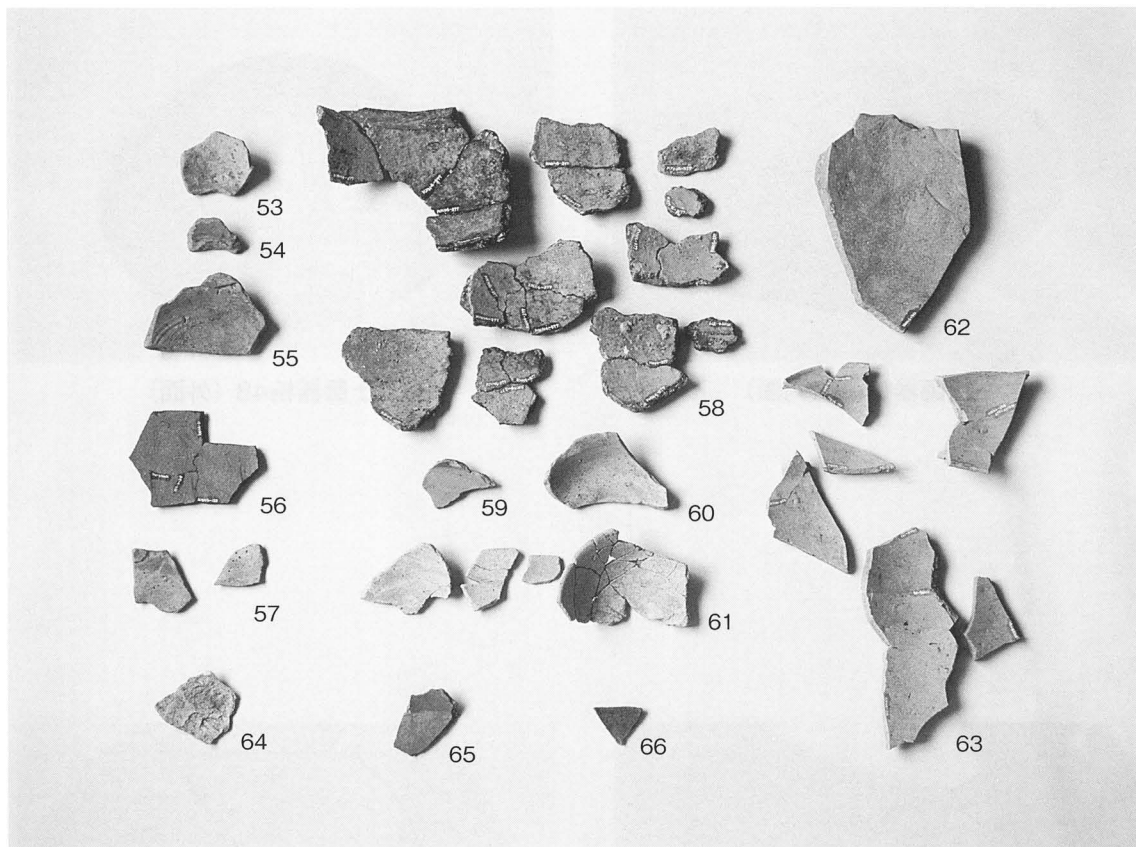
D) 土師器碗48底部 (外面)



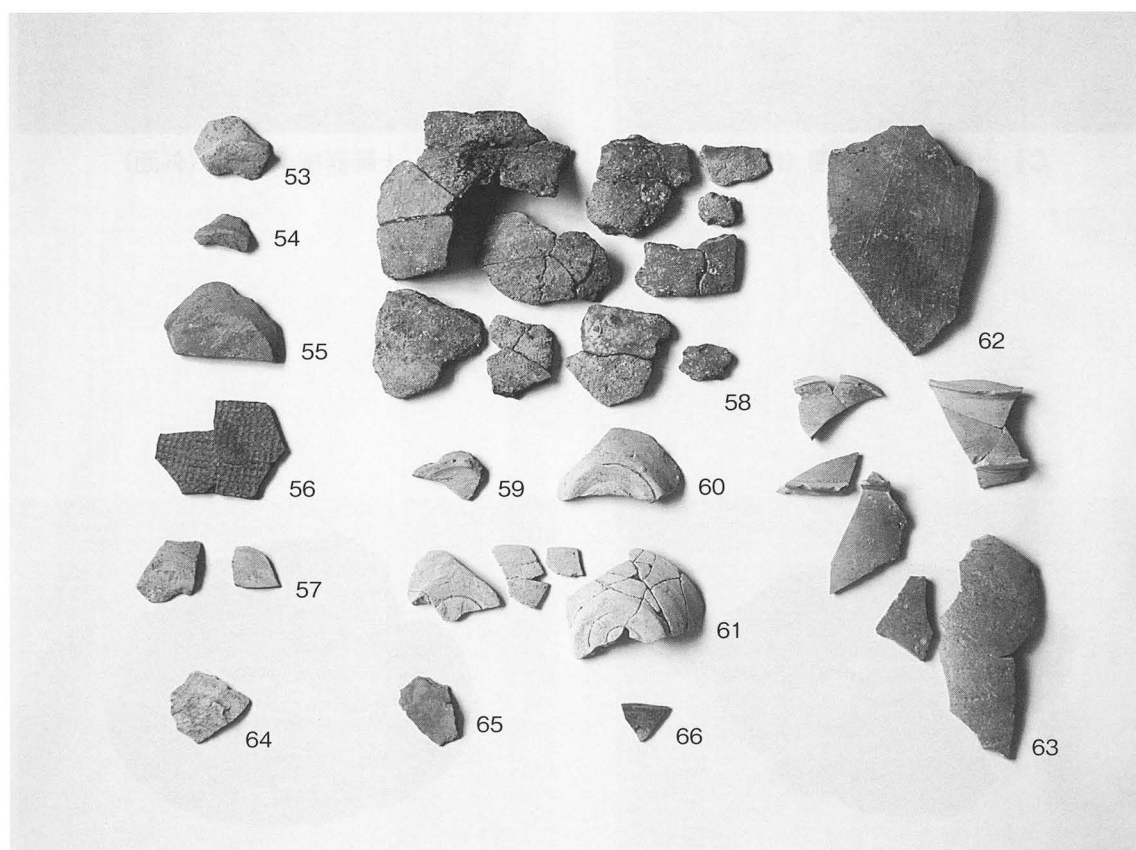
E) 黑色土器碗49 (内面)



F) 黑色土器碗49 (外面)



A) A地区 第4テラス 出土遺物53~63、A地区 第1テラス 出土遺物64~66 (内面)



B) A地区 第4テラス 出土遺物53~63、A地区 第1テラス 出土遺物64~66 (外面)

報告書抄録

ふりがな	へいせい19ねんど なかではいじあとはくつちようさほうこくしよ							
書名	平成19年度 中寺廃寺跡発掘調査報告書							
副書名								
巻次	2008.3							
シリーズ名	まんのう町内遺跡発掘調査報告書							
シリーズ番号	第4集							
編著者名	加納裕之							
編集機関	まんのう町教育委員会 中寺廃寺発掘調査室							
所在地	〒766-0202 香川県仲多度郡まんのう町中通875番地 TEL (0877) 85-2221							
発行機関	まんのう町教育委員会							
発行年月日	2008年3月10日							
総頁数	目次等	本文	図版	表	挿図枚数	写真枚数		
55頁	6頁	38頁	11頁	2枚	16枚	48枚		
ふりがな 所収遺跡名	ふりがな 所在地	コード 市町村 遺跡番号		北緯	東経	調査期間	調査面積	調査原因
なかではいじあと 中寺廃寺跡	かがわけん 香川県 かなたどぐん 仲多度郡 まんのう町 ちよう 造田 3469-2	374067		34度 7分 19秒	133度 55分 3秒	4/17~ 12/4	300㎡	確認調査
所収遺跡名	種別	主な時代	主な遺構	主な遺物		特記事項		
中寺廃寺跡	山岳寺院	平安	掘立柱建物跡、 柱穴、溝状遺構	須恵器、土師器、黒 色土器、西播磨産須 恵器多口瓶		山岳仏教草創期の 山岳寺院における 発掘調査		
要約	<p>中寺廃寺跡は集落から離れた標高600m~700mの山中に立地する山岳寺院である。創建時期は山岳仏教草創期である9世紀に遡る。現在までの発掘調査により東西400m、南北600mの範囲にA・B・Cの3地区に分かれて寺院を構成する多様な伽藍が展開していたことを確認した。香川県の寺院興隆期である10世紀には、A地区において寺院中心部である塔・仏堂が、B地区において修行と生活の場である仏堂・僧房が、C地区において祭祀的な遺構と考えられる石組遺構が造営される。この時点で、中寺廃寺は、機能が異なる空間が谷を囲んで向かい合う山岳・山林寺院として整う。古代山岳寺院の原初の姿を良好に示す中寺廃寺跡は、四国の山岳・山林寺院、山岳仏教を理解する上で重要な遺跡であると考えられる。</p> <p>平成19年度の調査においてはA地区の追加調査を実施した。その結果、第4テラスにおいては掘立柱建物跡を確認した。建物跡は床面の一部が強く被熱し、また調理具・供膳具が出土したことから、かまどを備えた「大炊屋」・「厨」・「かまど屋」等の調理施設であったと考えられる。</p>							

まんのう町内遺跡発掘調査報告書 第4集

中 寺 廃 寺 跡

平成19年度

編集・発行：まんのう町教育委員会

※題字は金澤正親氏による

印 刷：(株)美巧社

発行年月日：平成20年3月10日